WASON
HQ
1104
J57

Cure 1897
no. 440

明治三十年四月二十五日

女學雜誌

第四百四十號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百四十號目次

社說
實際の人品

女學
女學校に實益ありや
卒業の女學生に告ぐ
女子就學を增加せしむる方案 青柳猛

評論
西鄕南洲と勝海舟 落花淡人

隨感
聞くとの樂しみ◎誤解邪推なきもの何處に在りや◎海舟先生得意の感話◎名僧家政を訓す◎本多家雜新前の施藥 鷗村

教育
普通教育に於る宗教
現今の小學教育
教科書に就て（一、二）◎教育雜誌◎再び苦惑へり◎小學校の優等生◎小學校は小なる遊戲場なり
◎留學生の話 曲浦子

雜錄
蜘蛛、蜂、少女（鐵道被害地の人々に代りてよめる（泡鳴子）
立ん坊 一賤夫
花影小談（遊藝の妙◎花の下の俗物◎人を見るの濱近き大小）
古事斷片（二）◎案山子廼舍諸社中詠草 長汀

時文
契中關製◎僧服改正論◎新著月刊◎小說八宗選◎新小說第四號◎小御門◎海軍瑞話◎女界文壇雜俎

片々◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを措き、二十五日發行の分は、女學教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

●單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば其望に應ずべし

女學雜誌定價表

前金	一冊 金拾錢 一年前金 金貳圓（無郵稅）
廣告料	一行（廿四字詰）前金拾錢 同三回以上 一割引 同六回以上 二割引 但し不道德なる廣告は謝絕す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
送金	爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし（郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし）
注文	注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし

第四百三十九號目次

社說
家庭の春

講義
雛の孵化（巢鷄の撰擇◎卵の鑑定◎巢箱の構造◎抱卵中の注意◎孵坐法◎雛の飼育法） 小農夫

家庭
秘密内外の混同◎家政學の精髓
伯母樣
堪忍の藥（山岡活石士） 鷗村

兒籃
思ひ出草（一）
片々錄（三） さち子

隨感
花の春の辭◎幽鬱を如何せん

雜錄
經驗は事物の境を越えさるとあり 曲浦子
人力車夫 一車夫
古事斷片（一） 長汀

史傳
櫻のかげ懷古 山下石翁

問答
感情深き子供の教へ方に就きての問答

文藝
題詠題作
案山子廼舍諸社中詠草批評

時文
この花◎岡新丸◎家庭要訓◎ふたごゝろ◎ジャパン、タイムス◎新著月刊

片々◎時報

口繪◎日本最初の洋行女學生

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百四拾號

明治三十年四月廿五日發兌

社説

實際の人品

むかし聖人は平易卑近の敎訓を施こし、事々物々につきて當座の覺悟を示されたれば、何事も實地實際の說法にあらざるはなし。即ち皆な起つて行ふべく坐して守るべき日常の規律にして、惣べて是れ普通の常識に外るゝものにあらず。然るに世人之を尊重するのあまり、徒らに敬して遠ざけ、其說に六かしき註釋を附して只管ら高遠脱俗の趣きに解し去りたるより、折角の實際敎も大率ね空談と成り果て、人事常の心得方とは緣なきものの樣にせられたり。况んや、之を漢文美文に書き立てゝ、麗々たる格言道話となし、只以て歸命頂禮する一種の偶像となせしより、人々之を唱名して御題目となすのみとなれり。此に於てか、あらゆる聖人の敎は當初の主旨を失ひ、世人日用の心得となるはなし。之れ尊敬するに似て實は馬鹿にしたるもの也、聖人に對する至當の待遇と言ふべけんや。聖人は素と迂物にあらず、人情の秘蘊を探り、世態の曲折を勘辨して、何事に於ても其の要緊を看破したるもの也。之を以て折角信切に說法して世人に實地の覺悟を敎示せらるると、一つに皆な實際の經驗に合し、妙に現世の常識に通じ、所云る通たり粹たる微妙の實歷談たるものぞ、聞くもの、大抵あだに看過するは、眞とに殘念なる事にあらずや。

例へば、釋迦が一切の世相皆な心の發作なりと說けば、聞くもの大率ね高尚にのみ解釋し、中には、之を唯心唯識の哲學論などに當てはめて、近世哲學に於ける優劣當否を研究するものすらあり。元來、大哲學者とも謂ふべき人物の言論は亦是れ救世慰人の爲に發せしとゆゑ、釋尊などの說法を哲學的に解したりとて、其廉にて人世に益なきものと爲したりと言ふにはあらねど、近時に所云る哲學、即はち唯一向に學者風

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の空論を爲せしものと同様に解釋するは本來の主旨を失なへり。釋迦は、人々の迷惑執着を哀に觀じて、何事も心より自から起す妄想の如しと敎へ、たとひ如何ほど心外に準備すとも、先第一に、其心を調へざれば、所詮益なきヿ也と說法せし迄にて、眞に今日實地の覺悟に外ならず。悟るとも悟らぬとも、畢竟は斯く決着せざる可らざるヿにて、之は世事に經驗したる老功の人の皆な發明する所なり。即はち、六かしく書けば、心外無別法とも言ひ、今の哲學風に論ずれば、唯識とも唯心とも言ふヿならんが、話しの主意は畢竟此の實地の工夫にあるヿなれど、今の佛法を聞く人は更に高尙にのみ解釋せらるゝもの丶如し、高尙を惡しゝと云ふにあらねど、人間以外の事に空想して高くのみ走るは、寧ろ鳥の如きものなり、高しとて必ずしも善きヿにはあらじ。

又、孔夫子の敎訓とても同様なり。弟子と談笑して、洋々悠々として實地に說き示されたる一々の訓戒は、惣べて是れ日用當座の覺悟なれば、かの重くるしき文字に寫されたる漢語の金言も畢竟は老先生の經驗談に異ならず、皆な人情を極めたる通人のお話しなるものを、是も亦同様に敬遠することそ殘念なれ。論語に、人の己を知らざるを患へとせず、人を知らざるを患へとすとあり。又、言葉に尤なく、行に悔寡きほどなれば、祿は其中に在るものなりとあり。眞とに、人事を悉したる老功の說なり。世に立つて事を行はんとするもの、又は立身出世などを希望するものに取りては、以上なき有益の注意なれど、今日之を實地に覺悟せんとするものは餘り多からず、たゞ〳〵道德談として緣遠き所にのみ擱かんとする風あり。

つら〳〵考ふるに、人は、人次第にて、己の器量だけの事を行ふばかりなり。如何に僥倖を望みたりとて、到底、其の甲斐はあるまじき也。一旦、風雲に際會し、飛んでもなき出世を爲したりとも、己に實際の伎倆なくんば何の詮もある可らず。つまりは、人に見られて其の馬鹿らしさ加減を廣告するに過ぎず。高座に引あげられて、其の阿呆らしき面相を見物に見せ、之が一笑の料となりたりとて、光榮とは言ひがたかるべし。又た昔しより、實地に伎倆あるものが、わざ〳〵出かけて奔走したる例しは亂世の外にはあるまじき也。わざと奔走するにも及ばず、自然に其の精神が貫徹して、己の才德

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

だけは、相應に世の御用となりて實地に活用せらるゝものゆゑ、何んぞや必らずしも高座に出て究屈に坐ると坐らざるとの差を爭ふべきや。

果して人の進退を考ふるに、大抵は無理無益なる慾心によつて自から破れもし、自から馬鹿にもなるもの也。狐が油揚の香ひによつて罠にかゝるを笑ふ人もある樣なれど、お互ひ樣に、他の事のみにはあらぬやう也。自分で無理をして自分で苦しみ、自分で進んで出て自分で馬鹿になるものは、我々初め皆な然り。近頃ろ、友人が白痴敎育の事をはじめらるゝにつきて段々お話しを聞いて見れば、何となく、我々も白痴の樣に考へられたり。白痴にあらぬ人はあまり多からず、スタインが、洋行生を左樣に罵しりたりとか聞くも、必らずしも放論にはあらじ。

第一、古今東西の歷史を勉强して、年月人名を委細に承知する人はあれども、何故、眼前歷々として一進一退する諸名士の榮枯を考へ、取つて以て吾が實際の歷史眼とはせざるぞや。藩閥を攻擊し、老朽分子を罵しり、繁文縟禮を笑ひ、大勢に後れたりなどと他の事を責むるは易けれど、よく〳〵斯る人の失敗の跡に鑑みざれば、己れも亦た忽ち同穴に陷いるべし。人世は進歩するものにて、機輪の回轉は瞬速の間なれば、人を笑ひし我が人に笑はれ、子供を馬鹿にしたる我が子供に馬鹿にせらるゝは忽焉のこと也。油斷大敵と家康が言い續けたるは、世事に慣れたる老練の告白なり。

左れば、學ぶものも、行ふものも、出世を望むものも、野に隱るゝものも、畢竟、自分が『實際の人品』如何を顧りみ、只だ但だ實地の伎倆を練り、實地の品德を修め、俯仰天地に恥ず、回顧古人を尙友とするの識見を所有するが第一ならん。一家を治むるにせよ、一國の大事に任ずるにせよ、此の理に變りある可らず。學者にせよ、政事家にせよ、此の覺悟に異同あるなし。近來、ちとの風雲起り、人才登庸と云ふと流行し、人々たゞ出世を望んで、顏ばかり出したがり、腰の据ゑ方の大分動く樣なれば、釋尊孔夫子が此邊に言ひ置れたる老練なる御注意を謹聽するは、正に此時なるべしと思惟せらるる也。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學校に實益ありや

近頃、普連土女學校の卒業式、獨立女學校の卒業生會などにて講話せし大畧を筆記せしめ、其の梗概をのこす。

◎學校の設けは近代に至つて始まりしとにあらず、支那にても日本にても古より代々の學校と云ふものあり、盛んに英才を敎育せし樣なれども、扨て實際に有用の材となりしもの幾何ありや。試みに、古より天下の背骨となり、大黑柱となりたる如き人物の出處を調べ見よ。眞に當代の學校を卒業せしと云ふものは稀なるべし。此をもて世上舊來の諺ありて曰く、儒者にして國家の用を爲せしものは、五指を屈するにも足らずと。これ何の故ぞや。

◎抑も學校の設けあるは已むを得ざるの變則にして、申さば、致し方なく人爲的の世話を施すものなり。若し初めより、自然的、社會的の敎育穩健に行はれて、徐々として適當の開發手段だに行はるゝならば、學校なるものは實は無用となるべし。願はくは、戶々の家庭に於て家庭敎育を施こし、銘々の敎育者にして一人づゝ適應の敎育を施こし得て、學校などにて畫一器械的の手段を行ふとを止めたきもの也。但だ夫れ已むとを得ざるが故に學校なるものある所以を忘却し、かの敎育上の美なる理想を忘失するとある可からず。

◎舊日本に、女學校の設けなかりしとて、女子敎育なかりしと云ふは固より誤まりなり。舊日本の女子敎育法は、戶々の家庭に於て施こされたり。敎ふる人によりて一人づつに施こされたり。敎育としては寧ろ良き方法の採られたるながら、但だ、今日の文明に合せて不足を感ずるものゝ多くあるのみなり。其の敎育方針に至りては、頗ぶる優等のものとせざる可らず。

◎今の女學校敎育に於ても、克己献身の事を大切として敎育す。克己献身は女性の粹なれば也。但だ夫れ今の女學校に於て之を敎ふる時は、兎角に空論に流れ易し、古へに在ては、姑、之が敎師となり、一家の波瀾混雜、之が感化力となりて、實地に著しき有力の敎訓を與へしなり。又、今の女學校敎育に於ても、家政の敎授を大切とすれども、是れも亦た空

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

論に流れ易し、何んとなれば、之を實地に施こして、實地よりして學得するの手引を爲すとの自然に不足なれば也。見るべし、古の女子教育法は、方針としては、今の女子教育にすら優りしことを。何んぞ況んや、古へにあつて女子教育の絶無なりしなどと妄論することをや。

◎左れば、今の女學校教育に於て深く戒しめ切りに注意す可きは、學問の空に流れざる樣、實地の工夫の嚴かならんことこれ也。昔し、儒者が國家の裝飾となりし迄にて遂に其の有用の材となること能はざりしは、主として其學問の實地より離れしが故なり。學問、實地と離れたるの故に、儒者は國家に無用なるものとなれり。如斯く亦た女學生は家に無用なるものとなること勿れ。是れ歷々たる殷鑑に從ふの道なり。もし謬まつて此の道理を履み違へ、女學校に入つて新女學を受けたるの故に、家に無用なるものとならば、今の女學校の勃興は即ち女學の衰兆なり、何をもてか之を慶するを得ん。形を見て喜憂するは平凡の事ならずや、物の肝要は、其の精神と實際とにあるを知らずや。

卒業の女學生に告ぐ

青柳猛

燻れる麻を消すことなく、痛める葦を折ることなき、是れ人性の最美なるものなり。傲れるものを挫き、高ぶるものを卑くす、是れ人性の最俠なるものなり。青山の墓地、石塔木碑肅々として、そゞろに人生の哀れを催ふさしむるの邊、三島某の墓、獨高く聳へて、今なほ生靈を睥睨するもの丶如し。何ぞ夫れ傲なる。之を見るもの誰か其恩愛に感泣し、其仁德を讃揚せむ。

學窓を離れて世海に打ち出でなんとするの子女、往々才氣に充ち、英氣に溢れ、抱負絕大、將に天を貫かんとす、以爲らく、天下は宜く我がとりて躍るべきの舞臺たり、家にいりては、父母兄妹悉く我が命に聽くべく、嫁しては舅姑緣戚皆な我れに靡き、若しそれ一たび筆を提げ腕を揮て起り飛ばゞ、世必ずや贄を載せ辭を卑うして我れを迎ふる所あらなむ、我れ、この間にたちて動く處なかるべからずと、しきりに事に當りて之が王たり、之が主たらんを希がふ。然れども、幾何

ならずして、蹉跌は來り失敗その跡を襲ふ、何物の恨事か之に如くべけむ。時に及んで、徒に世の無情に憤り、罪を社會に嫁し、恨を天に歸す、未だ人性を達知せざるの儕輩なり。須く思へ、爾何の權威と力とを以て、庶人を制し、衆人に頭たらんとはする、爾何の勝ぐるゝ所ありて人々を役使し、人々に師たらんとはするかと、靜に顧み、詳に慮れば、我れはこれ欠點の塊躰、弱所の集合にして、短才と薄德と淺學とは、たゞ其特徵ならずや。今翻て世の人の見る、多くは皆な我れに勝りて能あるものなり。某の人所斷決行の力に富む、我れにこれなし。某の人應接坐作に妙なり、我れにこれなし。某の人家政整理に巧に、才學に拔んづ、我れにこれなし。此の如くに觀じ來れば、畢竟我れは是れ數るに足らざるの一土塊、何ぞ人を敎へ、何ぞ人を役するを得べけむ、よろしく人に役せられ、よろしく人に敎へらるべきものなれ。今僅に學窓の夢やぶれたるのみにして、何等の經驗なく、何物の徹底する處なく、しかも揚々人の上にたち、赤手以て己が包圍を攪きまはし、漫に先人を蔑り、肆に先覺を凌がんとす、世の之を捉き、其人をして轉迷悔悟する所あらしめんとするや、素よりなり。失敗蹉跌如何ぞ怪むべけむ。宜く人の驥尾に附し、其履の緒を解き、その長ずる所に習ひ、之に使事するの覺悟なかるべからず。

六

竊に思ふ、人界慘事多く悲事許多なり。諸子を今この間に送る、猶羊を狼の間にやるが如し、痛恨激甚うたた堪ふる能はず。而して、この悲慘なるもの多くはこれ衝突の結果なり―理想と現實との衝突の結果なり。而して、衝突は多く人爲よりす。それ天の爲せる禍は避くべからず、されど人の爲せる禍はなほ避くべし。人爲の衝突、多くはこれ好んで人の師となり、好んで人を敎へ、好んで人の頭たり人を制せんとするより來る。基督曾て宜く、爾曹導師の稱へを受くること勿れと。茲に於て、諸子大に謙德を釀養し、徒にラビくと唱へられんことを希はず、しきりに人の後につき、好で之に仕へ、これに學ぶところあるべし。是れ古の大人がとれるところにして、道に達し學に進むの所因、また世にありては、慘事より免れ、失敗蹉跌を未發に防ぎ、地に於て幸多く、父母と共に命長からんためなり。願くは、我儕のうち最も大いならんと思ふものあらば、須く先づ去りて人の婢たられよ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

事々物々肆に人の將帥たらんことをのみ欲して、非人の賤きもなほその足を洗ひ、之に聽かんとするの志あらざらんものは、未だ小人の譏を免るべからず。古の人傳へて曰ふ、雞口となるも牛後となる勿れと。是れ誤れり。人よろしく牛後となるも雞口となる勿れ。蓋し雞口をすてゝなほ牛後を取るの人や、遂に亦牛口たるを得べきの材なればなり。

身不肖、非才薄德、また學に淺く、其任に堪へざるを愧ること數々なりと雖ども、命運如何にめぐり、我星如何に動きけん、天津御神、我れを斯校に送り給ひ、諸子が輓かんとする車に若干の力を添ふるの榮を得せしむ。この日に際して、情感、言なくして止む能はず、些か高慮を促して、女戰士奮陣の門出に贐すと云爾。

女兒就學を增加せしむる方案

過般長崎に於て九州八縣教育品展覽會の節、長崎私立有志教育會より呈出したる懸賞三問題中、女兒就學を增加せしむる方案如何に就き第一等賞を得たるは宮崎縣延岡高等小學校訓導日吉昇氏にして、其方案左の如し。

一　其地方に於て嚴重なる規約を立て、就學を勵行する事
二　授業料を輕減或は廢除する事
三　書籍其他必要の器具を貸與する事
四　半日學校或は夜間學校若くは子守學校の制を設くる事
五　學年末に於て小學校の學齡兒童に關する諸調査並に比較統計表を製し、學務委員及び特別なる篤志者に配付し女兒の就學勸誘を請求する事
六　各地方に於て、適宜の區域を設け、時機を計り、教育談話會、或は教育幻燈會、若くは教育品展覽會等種々の方法を以て父兄を集め、子女就學の必要なる所以を談話し、以て奬勵勸誘する事。
七　兒童の衣服辨當及び其他の調度は、凡て節儉を旨とせしむる事。
八　男女兩兒童の間柄に注意する事。
九　家庭と學校との連絡を計る事。
十　女兒に必要なる教科を課する事。
十一　女教師を用ふる事。
十二　就學に差支なき疾病者は、教授上特別の取扱をなし、就學を奬勵する事。

第二等賞は、佐賀縣藤津郡嬉野植松喬次郎氏之を得たり。氏の方案は女子就學不振の原因を第一生活の困難、第二舊思想の浸染、第三向學の誘因缺乏に歸し、而して之に應ずる方法を左の如く擧げたり。

第一　社會に對する方法

甲直接法

（一）大に就學を督促奬勵する事。
（二）貧民の就學に便法を與ふる事。
（三）國庫金の補助を仰ぐべき事。

乙間接法

（一）教育幻燈會を開く事。
（二）通俗談話會を設くる事。
（三）婦人教育會を設立する事。
（四）有益なる圖書を閱讀せしむる事。

第二　學校と家庭

（一）教師は、時々家庭を訪ふべし。
（二）父母兄姉に學校を來訪する便宜を與ふべし。
（三）學校家庭の通信を密接ならしむべし。

評論

西郷南洲と勝海舟

（上）

落花淡人

笑ふべし自稱元勳の多きとや。若し謹聽して彼等が自叙傳を聞かば、あらゆる大事件は其の銘々が成就したる功績なるかと思はるべし。吾輩後進の學生又一向に先輩の言を信せんとすれば、所云る維新の大革命なるものは何人の手によりて成就せられしかに惑はざるを得ず。何んとなれば、自から廣告して、自己の偉勳なりと吹聽せらるゝ英雄の頗ぶる多ければ也。

然れど、大勢の跡は大綱によりて探るべし。維新以后三十年天則自から照して因果正に露れ、細岐小目の浮評落々として消失したる今日に方りて、而も倘ほ當年實際の大局を觀破すると能はざるは少しく迂なるにあらずや。龍、風雲を起し、風雲、砂塵を捲く、砂塵風雲に捲るる比ほひは、枯葉と雖ども倘ほ天外に飛躍すべし。彼の大勢に伴隨して好時の際會に僥倖せしものを目し、誤つて維新の功臣となす、吾輩は寧ろ今の論者の太はだ穩當なるに驚くもの也。近くは明治廿七八年の日清事件に際せし當時を回念せよ。一度び大勢激揚して國民悉な興に乘じ來れば、如何なる懦夫と雖も倘ほ英氣勃々たるとを感すべし。一種の奇氣全國に充滿し、人心皆な膨脹したるに方りては、起つて其機に狂奔するは尋常人の皆な爲す所ならずや。斯の如くにして維新の風雲に際會し、一時の僥倖に乘じて多少の新事業を經營したるをもて功臣と爲すを得る乎。左らば則ち元勳なるものの餘り高尙にてはあらざるとを覺らん也。

吾輩惟へらく、維新の大勢を促したるものは外交なり。其機を活斷したるものは、只だ二人者あるのみ。則はち、此の二人あり、幸にして敵味方に分れ、相ひ應じて授受一轉の革命を決了したり。所云る元勳の功臣として指を屈すべきは只だ此の二人あるのみ、而して之を補助したるものは、甲東と松菊とのみ。他の幾多の薩長土肥の俊才に至つては、僅かに其の裝飾修正を爲せしに過ぎず、まさに第三位に立つべきの人のみと。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

抑も、甲東と松菊とすら倘ほ第一位に立たしむるに堪へず、況んや、其の他をや。玆に激語を放つて公等碌々と言はんとも、吾輩は必らずしも叱正せじ。吾輩が、眞に推重して優に第一位に置かんと欲する所のものは、實に南洲と海舟との二人者あるのみ。

凡そ俊傑の明は、時務を知ると人を知るとにあり。南洲と海舟と、東西相敵して、而も觀る所同じく、知る所深し、其の初めて相見るや、一は民間黨の中堅を以て、他は政府黨の木鐸を以てせり、而して相談する所、一言内政の事に拘はらず、南洲切りに外交を難ず、海舟無造作に所信を告ぐ。兩雄の初めて交を結ぶ眞に此の機、此事にありき。南洲乃はち甲東に書を送つて曰く、事を成すものは海舟か、余は深くほれ申候と。海舟亦歎ふて曰く、知吾獨南洲と。夫れ幕末政維弛るみ、人心一大機轉を渴望するの時、天此の二人を下して、日東の明星たらしむ。一は其の暗霄を輝さんが爲に、他は其の曉霧を拂はしめんが爲に。互に異樣の光景を呈して而も同じに一樣の仰望に値ひす。帝國の近世史は此の兩雄あるの故に、頗ぶる人意をして爽快ならしむ。

然れども、人誰か此の兩雄の互ひに相知るが如く知らんや、況んや其の觀ずるが如く時務を觀ずるものに於てをや。明治三十年の人にして倘ほ斯の如し、三十年前、盧山の雲霧に彷徨しつつありし凡士にして、何をもて能く俊傑が破格の事業を洞察せんや。民間黨大率ね曰く、西郷は大奸なりと。政府黨も亦曰く、勝は大奸物なりと。夫れ一世の大事に任じ、卓然として非凡の識見を斷行するに方りては、古今東西、時人の非難を蒙むらざるはあらず。時人大抵之を非とす、乃はち其の識見の大なる所以、此の識見の斷行せざる可らざる所以なり。誰か當年に大勳位の賞功を拜受する如き果報者あらんや。

凡そ偉人の成す所ろ、千態万狀にして端倪す可らず、是時勢の救濟に任じて、機宜の活手段を施すが爲め也。南洲と海舟と既に主客の地を異にせり、成す所の形跡に於て相違ふあるは當然のみ。左れど、其の施こす所は惣べて公論なり、もし公々たる大綱に縁りて以て其の心意を忖度せば、當年の本色を看取するに於て必らずしも難からじ。吾輩乞ふ其の相似たるもの丶一例を擧ん。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

文久一二年の頃、舊幕府內、征韓の論あり、勝海舟實に之を唱ふ。明治三四年の交、明治政府にも亦た征韓論あり、南洲をもて發頭人と爲す。壯士聞いて奮慨せざるなし、皆な以て痛快とし、相傳へて今日に及ぶ而して其の眞相を看破するものは尠なし、惟ふに兩雄の征韓論は交易の爲めならん。槍を立てて、長崎に商賈したるほどの老西鄕たるもの、何んぞ此邊の消息に拔目あらんや。回顧すれば、吾等年少者の幼時に於てすら、算盤を弄するとは武士の恥辱とせられき。況んや、堂々たる一國の公卿輔にして、頑固正直の武士上りを相手にし、商賈の掛引を議して何事をか得んや。南洲は曰く、余一人にて使ひすべし、余は素袍直衣にて使ひすべし、余もし殺されたりと聞かば則はち軍を興すべしと。其の通商條約の結定に意ありしを知るべき也。惟ふに海舟の征韓論なるもの亦斯の如けん。然らざれば、幕末の經濟を以てして、如何んぞ此の阿呆らしき計畫を爲さんや。

俊傑は本來時勢の造物なり。故に、南洲は創業の爲に生れ、海舟は克終の爲に動けり。但だ夫れ創業なり、故に積極の運に居て、主地に立ち、遂に官軍參謀の名を以て潮の寄する如

く寄せ來れり。但だ夫れ克終なり、故に消極の運に陷いりて、客地に安んじ、不幸、賊軍使節の名を以て屹然として滿潮の間に立てり。凡そ二百五十年の大政府を打破するは容易の事ならんや。然れども、之れを打破するの容易ならざると同じく、其終を克くするは更に難し。一兵を弄せず、一火を擧げずして、談笑自若として大權を授受す、之を彼の些々たる內閣の交迭にすら種々の不快聞くに堪へざる運動を試むるの人士に思料せしめよ、庶幾はくは當年の大事を悟らん。海外の論者大抵奇として曰く、幕府倒れて新政府に忠なるもの古今其例を見ずと。蓋し日東帝國一天万乘の皇位を奉戴するものの外は、恐らく其の消息を解せじ。

南洲既に創業の偉勳を立てたり、憂ふる所は功臣の始末にあり。薩長幾多の士、豈に純然たる王政復古の爲に獻身せんや。彼等が功名は半ば富貴の爲にあり、取て以て第二の准幕府を建設せんとは、其の日夜に忘るると能はざりし所也。南洲深く之れを思ふ、東北鎮定の際、既に去意あり、當時誰か其の大入道にそり下したる眞意を看取せしものぞ。既にして新政府成り、兵士皆な錦衣を懷ふの時、南洲は厭然として爵祿

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を委棄し、故園に歸耕せり。之より後ち數ば喚起せられ、三たび台閣に上ると雖ども、去意一日も去らず、遂に、征韓論破裂の名を以て本懐を遂げたり。夫れ、維新に多少の功ありしものゝ未だ賞せられざるあり、賞せられて未だ足らざるあり、況んや、四方數万の不平士族囂々として新政を難ず。此時に方り、南洲たるもの、台閣に立つべきか、野に下りて彼等が慰藉たるべき乎。朝に甲東のあるあり、巧みに政論に任ず、亦何をか憂へん。南洲たるもの當に野に於て別に計る所あるべき也。吾輩は思ふ、南洲、野に於て不平黨の北斗となり、只だ一樞星の動かざるものありて、而も陪星の動くに任せ、妙に衆望を維ぎて治安を持續せしもの、其功、台閣にありて營々すると何ぞ擇ばん。南洲の器宇を以てして、奈何んぞ甲東と相爭ふとを爲さんや。斯の如きは畢竟兒分の闘伐にして言ば御殿女中の競爭に外ならず。南洲は、明治十年の西南事件にすら關はりなきなり、何んぞ見識に類して新政に不平をこぼすものならんや。南洲は創業立功の英雄として其の終を克くしたり。(何ぞ些々たる西南事件を問はんや)海舟は即ち源頼朝以來の幕府の結末を克くせしもの也。當時西郷が參謀たりし官軍ほど薄弱のものはあらざりしならん。伏見鳥羽の事ありて、慶喜、大阪より逃れ還るや、京師の諸豪傑議論區々たり、朝より夕に至りて議論未だ决せざる也、何人が能く直ちに官軍を發するの英斷を下せしものぞ。西郷隆盛、其夜飄然として姿をかくし、單身東に向ふ。一友に書を送りて曰く、東都に花を見んと、此れ官軍、東に向ふの决議なりし。抑も東海道を上り來りし官軍なるものゝ眞相は斯の如し。眞に西郷に扈屬せしものは壯士五百人に過ぎず、他は大率ね區々、別々の藩士たるのみ。此時に方りて海舟、駿濱に軍艦を遣らず、函嶺に一兵を置かず、官軍總攻擊の前夜、初めて南洲に會見し、一言忽ち大事を决す。然りと雖も亦別に備ふる所なきにあらず、一令を發して滿都忽ち火を失するの手段悉皆整備して而して兩雄莞爾として談笑せるもの果して何の意ぞ。海舟、南洲に別れて歸る、歸りて未だ家に到らざるに、板橋口の官軍既に休兵の令を受けたり。嗚呼、俊傑刄を交へずして互ひに戰ふ、豈に偉觀に非ずや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

花の西行

鷗村子

今日一日花に浮かれて、歸るさを春の夜の月に送られて、草臥の床に、またも手なれし山家の集を播いて、春なれや、花故に蹇れし古への清僧が、吟哦を誦して、其詩腸を叩けば、老高清猾の西行の影を呼び來りて、花開き花散るとありて、彼が見ぬ世の春も六百年を經つる、今日この頃、たゞに花の陰を忍ぶのみか、すて果きと思ひし彼が身にも、なほ花に染む心のいかで殘りゐかに、やゝ知り至るとあり。

凡そ古來の歌仙騷客多しとて、西行が如くに、櫻を愛でしものやある、また彼が如くに花を詠ぜしものやある。彼はよし野山に花の梢を見し日より、心は身にも添はず、霞に隔てられて、思ひやる心の花に行かざらん事を憂へ、うき世の思ひ出に風をいとはで花をながめん事を願ひ、櫻と共に散らんことを思ひ、花なき樹陰にいかで生息せんやと嘆ずることあれば、吉野の山の奥の其奥までも、殘る隈なく花を尋ねて浮かれ、花の下に春死して、沙羅双樹下の佛尊に似せんことを誓ひ、而も我後世を弔はんもの、希くは櫻花の一枝を手向けんかな、自らも亦庵中に此樹を植ゑて、見ぬ世の春を人や忍ばん、忍はゞ我に手向けん、櫻また年々の春に自ら我を回向せんと、彼れ西行は、春は心万朶の櫻樹に飛んで、花雲の際に彷徨ゐ、晝は日ねもす、夜は孤庵の夢に、咲くに喜び、風に驚き、散るに嘆き、落花片々の爲めに、周を圍はんとするまでの情は、鴫立澤秋夕の情より更にも濃かに、また仇めきたるものある、浮世を捨て果て、妻子との愛を割きし、此清僧に似氣なきが如く、高雄の文覺が、西行、捨身抖擻の姿を以て、佛種を蒔いて、佛果を收めんの念なきが如くに、徒らに、觀花弄月遊歷吟咏に、遁世の業を過さんとするを憤りしも、此似氣なきを認めたればなり。而して亦一たび彼と接するに及んで、其高風に感じて、我彼を打つべきものに非らず、彼却て我を打つべきものなるを覺りたるも、また此似氣なくして、而も大に所以あるを以てなり。

試みに花下に念じて、西行が昔六百年の清姿を想ふ。

廿三歳にして家を出で、世を遁れし前、其憲清といつし昔の西行は、北面に武士として、文武兩道兼ね到らざる處なく、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

蓋し王覇の才なりしとは、自らも亦之を信ぜしとぞ。然るに一朝同苗某の急死によりて、妻子を棄て、家を出でし所以のもの、豈にたゞ一時人生無常の感動に激せられしが爲のみならんや。彼は曠世の大才、希代の英物、鵬翼の志ありて、而して東夷跋扈し、王家の陵替營ふるにものなきを見て、慣慨有爲の志必ずや禁ぜざりしならん。而して思ふに彼同苗某もまたこれ一個の英物、西行が朝夕共に志を談ずるに足るの人なりけん。この兩雄深く語らふ處ありて、必ずや爲す處あらんとして、刎頸啜血の約ありしならん、然るに何等の無情の風ぞ、一朝この心友を奪ひ去りしより、天下また共に志をいふに足るものなし。爰に於て乎、月曇らざるとなく、花散らぬとなく、物思ふ我身を嘆じて、圖南の翼を深く藏め、世に友として我憂憤を慰むるものを花月に求め、六十餘州到る處に此友と會して、志を談ぜしに非すや。

花多き中にも、深く櫻を愛でしは、咲くに美しく、咲けば万朶の花の雲、散るとに潔く、散れば滿地の花の雪、其美しきと、其潔きと、西行が武士の心膽と相照して、有情無情共に契合する處多かりしによらずんばあらず。櫻花の開落は亦以て西行が禪味を養ふの好題目たりし歟。云ふ勿れ、結跏趺座して三昧に入らずんば、禪定を得がたしと。西行の花月に放浪して唫咏を事とせしもの、其奥義は、大なる修禪なり、大なる鍛練なり。山水の險に荒修行を積みし文覺の鍛練工夫も、西行が花下月影の鍛練工夫に及かざりしに非ずや。造化至大者の拈華に微笑したるもの、此に西行あり。

曾て同人と、西行を引見したる源右府の眞意を、揣摩することあり。西行は賴朝の武威をも物の數とせざりし、文覺をして、一見心服せしめし程の英物なるに於て、彼が六十餘州の花月を友として、漫遊を恣にするの擧動、其眞情や右府も了會に苦しみ、彼或は天下に事を成すの志あるに非らざるかを疑ひしものなるべし。されば兵法射術を聽くと稱して、彼を引見し、西行の人物と心中とを察せんとはせしにあらさる歟。右府の西行に贈るに銀猫を以てせしは甚だ訝し。彼は捨身行脚の一僧、銀猫の貴きも、彼に於ては塵芥の賤しきと異るとなし。賴朝の智、豈に之を知らざらんや。然るに殊更に之を贈れるもの、當時の世にありては。頗る價貴き銀猫を獲て、西行、如何かするを試しにはあらざるか。而して西行も

亦、右府の胸中を洞察せるが故に、此贈品を辭退せず、處もあらんに、故と衞士の戒嚴忽せならざる營府の門外に出で丶、之を見童に投與して、我が志を示せしならん歟。此一事、傳へて專ら西行の廉潔無慾の故となす。さなり、見童を愛するまゝに與へしにてもなるべし、然れども一の深意の贈者と被贈者との間に存するに非ずんば、其廉潔の志を以てして、なほ一旦快く受けたる將軍の賜、直に之を門外に棄つるが如き非禮の擧動は、西行として有る間敷思はる。蓋し一個の銀猫は、當年の双雄が、不言裡の暗鬪に非ずや。

西行は觀花弄月吟咏に遁世の日を銷して、彼は浮屠の本分たる傳道を事とせしの遺蹟なし。然れども西行の傳道は頗る大なり、其佛種を傳播して佛果を收むるの功、弘法行基に劣る處あらんや。見よ、數百年の今日に至るまで田夫野郎の徒も、西行法師の名を傳へて、其清德を欣慕するに非ずや。此處に大なる傳道ありて千載に及べり。西行には佛像を刻し、佛寺を建つる等の形あるの傳道なしと雖も、彼には人の心を殿とする活ける傳道あり。無爲にして百世を化す、西行は實に古今の雄なり。吾人は年々の春に逢ふごとに、花の下に圓位の清姿を想ひ出で、其高風偉德を欽して、其化を仰ぐ。

隨感

○聞くとの樂しみ

人の師となる勿れとは、師匠らしき心構へのみして、他に學ぶの謙遜を失ふ可らずと云ふの義ならん。世には一藝一技を聞かんとて來訪する人をも悉とく吾が弟子の樣に言ひ立てんとする不愍の人も多けれど、斯く言ひ立らるゝとを恐るゝ狹量の人も亦た多し、同じ氣の毒なる見識にあらずや。古より、大人は皆な人に聞くとを樂しみとせり。申さば、万人を師となし、天下に教へられ、宇宙の弟子となりたるの外あらざる也。たとひ、老農芻蕘の言語なりとも、之を謹聽するの態度は、弟子たるほどの覺悟なくして可ならんや。左らば、其の相手が我を弟子と呼びて滿足するときは、左樣に呼ばせて滿足せしむるは、報恩の一端なるべし。牛肉を食ひて吾が肉

を肥やせば、牛は得意らしく、あの人の恩人は我なりと申さん哉。大地を踏んで運動し、強健になれば、大地も亦た高慢を言ひたかるべし。而して後ち之によつて益せし當人が世に夫れだけの奉公を爲せば、あらゆるもの皆な得意となりて、天下は泰平に、世は至つて長閑けきと也。

○誤解邪推なきもの何處にある

之を觀ずるときは、人は互ひに矛盾衝突して精力の三分の二を磨滅するものとは見ゆ、誤解又誤解、邪推又邪推、世は際限なき行違ひの騷動のみ也。然し乍ら、達人ひとり高しとして暴りに他を輕んずると莫れ。翻つて人間が天地を解釋して、其の眞意を推察するの躰を考ふるに、抑も全たく誤解邪推の弊に陷らざるもの何處にありや。左らば、人何の辭をもて、他の卑陋をのみ責めんとするや。天地神明の偉大にして、且つ人に非らる、抑も眇たる吾輩人類の互ひに誤まる素と當然の運にあらずや。

○海舟先生得意の感話

海舟先生が涙を落して、毎度感話せらるゝものは、左の逸事なり、

家康、大軍を率ゐて東より關ヶ原に入るの當夜、西軍に參謀會議あり。島左近、部下決死の兵五百人を警戒し、即座出發するの手順を了して、而して徐に立策して曰く、今夜、家康の兵長途に疲るゝに乘じ夜撃せんと。諸將囂々として討論し之を非とす。左近、爭はず、左樣候かと一言し、退坐して直ちに遺念の品を故鄉に送りたりと。

○名僧家政を訓す

近頃ろ新聞紙に左の記事あり。頗ぶる美なる戒しめたり。訓するもの、覺るもの、双ながら麗はしきとなり。

京都の薪炭商津田某擔雪居士と號し曾て荻野獨園に參して省あり、而して早く歿す。其の妻みつ子能く家を守る。一日獨園、みつ子を訪ふ、みつ子玉露の茶を薦む、獨園唇舌を鼓して此の如き旨き茶は老僧生れてより初てなりと頻りに賞して已まず。みつ子慧敏早やくも其の奢侈を戒むるの語なるを知り曰く是は別に買ひたる茶にあらず、宇治の親族より贈られたるものなりと。獨園曰く縱へ親族なればと

て貫放に只はおけぬものなりと。茲に於て、みつ子語を轉じて、擶雪沒後の家政を語ること太だ詳明なり。獨園曰く、「あまり噺が奇麗過ぎる、世間はさう奇麗には行かぬ筈ぢや」と。みつ子是れより心を家業に注ぎ、儉勤以て擶雪の遺業を守ると云ふ。

○本多家維新前の施藥

島田蕃根翁の談話に、今の森川町に住居さるる華族本多家は、維新前、藩家の定めとして、家中に病人あるときは醫藥を惠み、全治までは幾日月かゝるとも構ひなく施こされたり、中間などは、休み半分、お藥を頂戴して、之を蚊いぶしに用ひし横着者もある由なれど、一切頓着なしに此の慈善を行はれしとなり。

敎育

普通教育に於る宗教

今の論者動もすれば論じて開發的敎育と云ふ。蓋し人性本來の天稟あるを信じ、之を開發して圓滿に完全せしめんとを要とする也。

然らば、人の性情のうち、甚だ高尙にして最も有力なる宗敎的氣質は、之を如何んかして助長するやと問はんに、論者大率ね定說あるとなし。大抵言を左右にして宗派的鬪爭の陋劣を談ずるのみ。夫れ宗派と宗敎とは同じからず。宗派的特色を加へざるの說法を爲すと能はずと言ふものは、例說學論を添へざるの講義を爲すと能はずと言ふにひとし。單に宗派の不是を言ふのみにして以て宗敎を不可とするの論理となさんとするは誤謬なり。

夫れ、崇敬寅畏の念、確信獻藥の氣、殊勝にして優美なる慈愛心等は、宗敎に於て專ぱら涵養する所なり。人或は尋常世間の道德論を以てして能く此の開發を爲すとを得べしと言ふものあらんが、試ろみに實地に經驗して其効果を味はへ、抑そも眞に其結果を收め得たるもの何處にある。世人切りに今の通弊を歎ずるのみ、而も其の起源の多くは宗敎的素養を欠くの故に由るとを念はず、未だ曾て種まかずして而して苗の生へざるを慨するは寧ろ愚にあらずや。滔々たる浮薄弱志の

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

時弊や、遂に宗教感なきの故に歸せざるとを得るの論者、何處にある。
よし假令ひ、時弊の起因論を異にすとも、人に宗教的情操の天稟ありて、而も之を開發せざる可らざるもの頗る明白なるに係はらず、今の普通教育の忘然として惣て之を度外に置くは何の故ぞ。所云る圓滿の開發とは、有益にして有力なる一性情の助長を遺失するの謂か。論者、何の辭ありて敢て此の一科を欠ぐ、吾輩、堂々の論辯を開かざるや久し。或ひは言ふものあらん、西洋にも亦た普通教育に宗教を用ひずと。抑そも是れ西洋教育の形骸を模倣して、其精神を看取せざるもの也。
凡そ普通教育は、立憲政躰と伴隨し、社會の規律習慣の固定するに因りて初めて能く行はるゝもの也。西洋に普通教育行なはれて、方今の組織を爲すや、別に之を應援して初めて完きを爲すの實あり。即はち、普通教育の制度は、更に大なる國民一般教育の爲めの一器關たるに過ぎざるのみ。何をか、國民一般教育の爲め器關惣躰と云ふ。一に、家庭教育、二に、社交教育、三に、寺院教育、四に、即はち學校教育これ也。

(天然教育は論を待たず。)夫れ、西洋には、他の三育並び行はれて而して學校は但だ其の一部を擔當す、就中、智育に偏して他を顧みざるとを主旨とするに係はらず、我國の論者單に其の形式を學んで而して智育に偏するの結果に驚くものあり、嗚呼何等の拙劣ぞや。抑も吾國方今の如き過渡不定の時代に在ては、家庭、社交、及び、寺院の三種の教育皆な頼みがたし。たとへ頼むべしとするも、學校教育と氣脈を通じて相應援せしめ、以て互ひに部分の擔當を爲さしめんとは頼む可らざるの要求なり。左らば、則はち、學校に於て、あらゆる教育を施こさざる可らず。就中、其の普通教育に於ては、眞個に圓滿的開發の期成を悉皆其の學校の手に所望せざる可らざるにあらずや。此時に方りて、獨り宗教々育を欠かんとす。抑そも之を無用とする乎。果た又、他の何處に托せんとする乎。
夫れ、普通教育の宗教々育に於ては、基督教にもあらず、佛教にもあらず、神道にもあらず、儒教道教にもあらざる(然し乍ら此等を否定するにもあらざる)一種の偏通宗教観を採らざる可らず。即はち、宗教的情操の精髓にして、所云る

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

宗派的の僻見に陷いらざるもの也。之を以て此に施こす、初めて普通敎育の普通的宗敎々育たるとを得べし。之を施こすに論者何の異議ある。論者或ひは之を以て施しがたしとする乎、笑ふべし、宗敎を知らず、又、宗敎界の大勢を知らざるとや。

現今の小學敎育

曲浦子

明治政府初めて小學令を頒布するや、當時の小學校なるものは組織極めて不完全にして、敎授法殆ど見るべきものなく、之に任ずるの敎師としては、素より師範學校の卒業生とてもなければ、正式の訓練を受たるものはなく、止むを得ずして、地方の儒者もしくは多少文字に通ずるものを擧げて敎員となし、敎科書亦備はらず、僅に西洋讀本の飜譯なる二三種ありしのみ。而して其上級生には、今日中學校生徒さへ、在學中、敎科として受け得ざる日本外史、十八史略の素讀を學ばしめたる有様なりき。當年の小學校は正にペスタロチー、フレーベル出でざりし以前の歐洲の兒童敎育も斯くやと思はるゝ計の觀ありて、今日を以て之を見れば、轉た憫笑に堪へざるものありしなり。

されど敎育上の智識は比年進歩し來りて、今や學制殆ど完備し、敎授法は日々の研究を積ねて、益々巧妙なるに進み、正式なる訓練撿定を受けたる敎員の數多く備はり、敎科書また其良好なるものを有す。是によりて之を見れば、我敎育界二十有餘年間の進歩なるものは蓋し歎美に堪へざるなり。形躰は既に備はりたりと雖も熟々其内情を察すれば、我敎育界は、なほ學理空論に惑ひ、未だ敎育の大道を感得せず、隨て確乎たる大方針を持して、之に進めるものに非ず。要するに我敎育界は未だ迷宮里に彷徨せるものなり。殊に小學校の敎育の如きは、多くの敎育家は、其完美善備を稱してやまざるべし、然れども吾人は之が現狀を見て、頗る遺憾とする處を認めて、兒童の爲に、大に痛ましさを感ずるものあり。

兒童滿六歲に達すれば、尋常小學に入學するの義務を生ず、入學後は一日平均少くとも四五時間の敎授を受く。其一敎科時間の長は五十分内外に及で、五分乃至十分の放課時間の後

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

には、直に敎場に追ひ入れらる。彼等の敎場に入るは、一の苦役に似たり。彼等は强ふるに多量の智育の注入を以てせらるゝものなり。其德育と稱する倫理なるものも、これ全く智育なり、德育の實何處にあるかを知らず、其の躰育と稱するものも、彼等が嚴酷なる法則の下に驅馳せらるゝものなり。而して敎師は各任ずるに、プロフェッソルを以てし、小學の兒童に臨むに大學敎授の心持ちを以てするものなり。彼等の敎育は兒童に早熟を要求するものなり。現今小學校の實相は蓋し如斯し、少しく事實を觀ずれば、予を以て誣言するものとなすと能はさるべし。斯る敎育法は、兒童の腦力に過ぎたるものといふべく、されば之を明治五六年の交の小學敎育と比較するに差異五十步百步の間に在り、豈に之を以て彼を笑ふべけんや。

今日往々兒童の就學義務年齡の增加を唱ふるの論者あり、然れども吾人は現今の小學校敎育にして、其形躰を保存せんとするには、入學年齡を延期して滿八九歲となし、而して幼稚園と尋常小學との中間に一の簡易單純なる敎育組織を設くるとあらんを希望せざるを得ず。されど更に望むべきは、此小學敎育法に一大變更を加へて、學課時間を二十分乃至四十分となし、學課と學課との間に、二十分乃至三十分の自由遊步時間を與へ、兒童の遊步に飽きて學課に入らんとを欲望せんとする頃ほひに、新鮮なる腦力と興味とを以て學課を受けしむべし、而して一日授業時間の數は、尋常小學校にては、三乃至四の學課時間、高等小學校にては四乃至五の學課時間と定めんとなり。なほ遊步時間中には、興味と變化との多き遊戲をなさしめ、又音樂を以て之を助くべし。

以上の變更は必ずや兒童の敎育上に大なる裨益を生じて、彼等をして早熟せ志しめんとする今日の弊害より救拯するとを得ん。吾人は現今の小學敎育に慨する處尠からず、早晩之に一大改革の起らざるべからざるものなるを信じて、爰に其弊害の一端を畧說し、且つ之を救治するの一策を述べて、其改革を促すの一動機たらしめん事を欲するものなり。

◎敎科書に就て(一)

敎科書の自由著作を許して、當局者之に檢定を附することゝなりて以來、爭利の徒、利を爭ふて、敎育界に甚しき醜聞を流し、其威信を害せり。故にまた此頃に至りては、敎科書は之を當路に於て編纂し、全國の一定を計るべしと論ずるもの

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

あり。如斯は或は以て今日の弊害を救拯するに足らん。然れども彼朝令暮改、父兄をしては、教科書變更の爲めの費用多きを嘆ぜしむること今日の如きに於ては、是れ亦實に教育普及の一大障礙たるなり。夫れ教科書の如きは、大抵のものにてよし、到底完全なるものゝ得らるべきにもあらざれば、亦さるものありとても、教師の力量足らずんば之を善用すること能はず。また彼に力量供はらば、不完全の教科書なりとても、巧みに之を善用すべし。教科書の變更すること近年の如くに頻繁なりとても、其變更によりて、教育上何程の利益を増進したるやを問はゞ、蓋し指ざして其量を示し得るものなからん。吾人は教科書に左程の重きを置くものに非ざるが故に、あまりに不適當のものならざる限りは、何人の著作にても可なり。また旣に用ゐ來りたるものは、强ひて變更するの要なし。彼檢定と稱して教科書の採用を、あれよこれよと制限するが如きは、彼忌まはしき醜事をも生ずるに於て、大關係なしとすべからず。

吾人はまた彼檢定なるものを廢して、自由著作を許して、自由採擇を學校長教師に任せなば、彼等は各個の力量に適したる利器を擇んで、教授上更に有利なるべく、またかの醜事の發生も或は減少せん。されど世に功利の徒ある以上は、彼の如き醜事も悉く之を除去し得べきに非ず、たゞ貯る處其發生の掛念を可成減少するにあるのみ。

◎教科書に就て(二)

今の教育者はあまりに教科書の効能を信じ居るものゝ如し。然れども教育上其効力たるや、甚だ大ならず。また教師等の善良と認めたる教科書とても、小兒には不適當なるものなきに非ず。此間の消息よく察せずんばあらずして、よく此事ありや。

教科書の著述出版、頻々として多し、何れも皆其編纂の巧妙を自讚す。然れども彼此殆ご間然する處なく、彼讀本、此讀本、たゞに文章の出處を多少異にしたる迄の事にして、而して學級の進步に從つて、難易の差、見るべきものなきも殆ご等類なり。

今の教科書を編するもの、讀本の如きは、多く故人の文章より撰拔して、一の文學書を成すものなり。而してまた自作の文字は文章の拙なるが多し。且や兒童の

爲めに、家庭の和樂を助け、また其純潔なる精神を補益するに足るべき、無邪氣なる、清潔なる、また興味多き材料に乏し、此點に於て、日本の讀本は、未だ西洋各種の讀本に及ばざること遠し。

教科書の編纂いよ〳〵巧妙(?)なるに至りて、まかして兒童にはいよ〳〵困難となるなき乎。試みに日本歴史の教科書を繙くに、いづれも、簡短を主として、其弊や梢論なる二千有餘年間の歴史を、僅に菊版本四號活字數百頁の中に文明史林を以て網羅し盡くさんとするによりて、其教科書は、頗る意義の明瞭を欠ぎて、難解の文字簇集するものとなり了れること比々皆殆ご然らざるはなし。吾人は如斯き歴史書を以て、兒童をして果して歴史の概念を得せしめ得るや否やに大に疑ひなき能はず。編年史は歴史を知るの初めなり、文明史は其後なり。然るに毫も歴史の概念なき生徒をして、直に文明史を學ばしめんとするは、教授法頗る其當を得ざるものなるを信ず。

今日の教科書を編するものゝも、之を教ふるものも、共に國家的とか、忠君愛國とかいふ、いと六ヶ敷き理想を以て、兒童の幼稚なる頭腦を壓付せんとす。而して其效果如何、或は恐るこれ遂に兒童をして、自己にはなほ無意義なる文字を妄信せしめて、偽善に陷らしむるものに非らざるかな。滔々たる教育家、兒童に加ふるに大人の頭腦を以てせんとするが如き、夫れ甚だ誤まれるに非ずや。

教育雜誌(再)

教育雜誌の筆や說を立つる謹嚴なるべく、事を記する莊重なるべきと、曾て之を論じたり。此要求は、近頃に至りていよ〳〵ます〳〵切要なるを感知す。教育雜誌の責任多き紙面をして、無經驗無主義なる小學教員の漫に輕率なる筆鋒を弄せしむるの草紙たらしめて、而して多の讀者を得んとするものが、部下に一二を帶ふ有力なる教育雜誌として發行せらるゝなんごは、殊に寒心すべきならずや。多くの經驗あるものは多くいはず、多くの修養あるものは多く語らず、大賢、愚なるが如しとは是れの謂歟。されば彼教育雜誌上に輕々しく論議し、漫に事物を評し、甚だしきは他を攻罵するが如き、通常の文士論者に於てすら忌むべきに、まして職責重大なる教育者に於てをや。吾人は今日の教育論理を見てこの痛言なきと能はざるものなり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎皆惑へり

今日の教育家の、空論に惑へるも甚しきかな。開發的といひ、精神的といひ、國家的といひ、たゞ唱ふるのみにして、畢竟其眞意の歸せる處を探求する能はずして、只惑へり。曰く教育は人間を開發進歩せしむるものなりと。其言ふとや美、されどこの定義を實地に解釋するには如何すべきに惑ふて、自ら多くの迷路岐路を成して、たゞ迷へり。教育界はたゞ學理談の囂々を聞く、たゞ學政談の喧々たるを聽く。如斯に喧々囂々たるは豈し教育界の祥事に非ず。

◎小學校の優等生

哀れむべきは小學校の優等生徒なり。彼等の學業試驗に成績よろしくして、賞品を受け、席次の上位を占め、教師に可愛がられ、父母に喜ばるゝより、いよ〱乘り氣になつて、精々と讀書勉强す。さする程、此の兒は勉强者の名譽を持ち上げて、而して其結果彼の兒をして、過度の腦力を使用せしめ、遂に大に發達する事能はざらしむ。見よ小學校にての優等生が、年長じて後、却て當年の落第生に劣るを多きを。たゞに小學校のみならず、中學以上の學校に於けるも亦然り、既に專門教育に入れば、大に面目を異にするものなれども、なほ大學の學生のあまり、學科上に成績よきものに、後日有爲の人材を見出すを稀れなり。人に三つの不幸あり、年少うして科第に登る一の不幸と。學校に於て優等生として、師父より持て囃さるゝは即ち小兒が後日の不幸を生ずるものと知らずや。

◎小學校は半ば遊戯場なり

幼稚園は全然幼兒をして良く遊ばしめんが爲めの場處なり。園と名つくるの意實に爰に在り。小學校に至りては、半ばは之に學を授け、半ばは之をして遊ばしむべきなり。教師は小兒の遊戯を監督して、惡しきに陷らず、危險を招かず、且つ智識を益するたよりともなるやうになして、其上に多少の學を授くるを以て職とす。この眞意の存するや、師父共に之を解せずして、而して今日の小學教育なるものをして、迷路に彷徨せしむ、之に入るの小兒たるものまたいたましいかな。

○留學生の話

ジヤパン、タイムスより抄譯

邦人歐米に遊學するもの、文久二年伊藤侯及び井上伯其他三名の學生英國に赴きたる、また故同志社總長博士新島襄氏、百難を犯して渡米する等を以て、殆ど其嚆矢となすべし。然れども所謂留學生と稱し、官費を以て海外に派遣せられたるは元治元年時の幕府より和蘭國に留學を命ぜられたる榎本子、故男爵西周、伊東方成、津田眞道其他の二三氏にして、多くはレイデン大學に在りて教を受けたり。當年の留學生、頭には髷を戴き、兩刀をたばさみたる異様の風采には、和蘭人等頗る奇異の思ひをなせしならん。

幕府の派遣留學生は以上の諸氏に留まりしが、大政一新後政府の歐米に學生を派遣すると、年々に多く、特に米國の如きは、我邦留學生の洪水に侵されたりとやいはん。幕府は其末年に及んで、諸藩をして學生を南校に致さしめしが、其數最大藩は三名宛、之に次ぐは二名宛、第三等の藩よりは一名宛にて總計百五十名の諸藩學生は一時江戸に集り來りたり。また維新の功業に預りたる大藩中には江戸に學生を派遣せしのみならず、また數多の留學生を米國に遣したり。

維新の功業既に成るや、新政府は、歐米の文化を輸入するに忙しくて、山縣侯の令息山縣德島縣知事、井上伯の令息井上無任所辨理公使、松本鐵道局長、目賀田稅務局長其他の諸氏は、明治政府の初めて米國に留學せしめたるものなりき。其後明治四年岩倉右府の歐米に使するや、隨ふて米國に留學せし學生亦多く(譯者いふ此時大山夫人津田梅子外三人の女子留學生もありき。)於是乎、米國留學日本學生の數は一百名以上に及びたり。撰拔も碌々にせず、むやみに派遣せられたる留學生の如斯くに增加して、よからぬ報告の本國に達せしより、時の政府は、明治七年九鬼隆一氏をして事實を調査せしめしに、果して報知の如くなりしかば、一時に一百名の留學生は歸朝を命ぜられたりき。如斯に新政府初度の派遣留學生の多數は不成績を奏したりと雖も、なほ其中には、前にいへる山縣、井上、松本の三氏の外田尻稻次郎、金子堅太郎、其他の人々の如くに、成功したるものなきに非ず。尤も田尻、金子の兩氏は、元と自藩の派遣留學生なりしが、後に文部省の監督を受けたり。明治八、九の兩年開成學校より數名の留學生を渡米せしめたり、中に齋藤修一郎、鳩山議長、小村外務次官、栗野伊太利公使の諸氏ありしな

り。工部大學はまた明治十三年二十名の卒業生を出せしや、彼等を海外に送り、其多數は蘇格蘭に留學したり。司法省法學校も亦明治十七年に十二名の卒業生を獨乙に留學せしめたり。可笑しきは彼等法學士は法學校に在りては佛語をのみ學びたるものが、獨乙に派遣せられたることなり。札幌農學校も亦明治十七、十八の兩年に數多の留學生を米國及び獨乙に送りたり。外務省も亦留學生を派遣したる事ありて、明治十九年に國際公法研究の爲七名の學生を伯耳義に遣したるが如き其例なり。其七名の中には今の朝鮮京城在留秋月日本領事、伯林日本公使館在西書記官ありき。また中田外務省政務局長は、同省よりして支那に派遣せられたる留學生なりき。

陸海軍に在りては、大山侯初めて陸軍省よりして瑞西及佛國に留學を命ぜられて、兵學を研究したり。英國は其高等の海軍兵學校には他國の學生の入學することを許さゞるが故に、同國に於て教育を受けたる日本海軍々人の數甚だ尠く、黄海の海戰に英名を轟かしたる伊東海軍中將は其僅少なる中の一人なりき。されど米國アナポリスの海軍兵學校にて教育せられたるものは頗る多し。(瓜生大佐、世良田大佐等實に其中に在り。)

以上述ぶる處は、先づ前世紀とでも稱すべき時代の留學生なるが、爾來文部省より出づる留學生其數甚だ尠からず、昨年の如きは一時に多數者を派遣し、なほますゝゝ其數を增加せんとするの傾向ありと聞く。今明治廿五年より同廿八年に至る年々の現在留學生を統計するに左表の如く、而して留學生は三年乃至四年を以て交代するものなれば、實際の年々に新に派遣する人員は四を以て合計を割れば、實數に近きを得べし。

	米國	英國	孛國	佛國	獨乙	墺國	支那	朝鮮	伊國	白耳義	合計
廿五年		一〇	四	八	三二	一	四	三	二	六	七〇
廿六年	一	八	[illegible]	六	三〇	一	四	三	二	三	六一
廿七年	一	九	四	四	二四	三	一	三	二	二	五三
廿八年		一三	一	五	二三	一	一	三		一	四八
合計	二	四〇	一二	一九	一〇九	六	一〇	一二	六	一二	二二三

又明治十六年より同二十七年に至るの間、政府に於て留學生學費として支出したる金額は總計一万一千五百七十一圓なりといふ。

雜録

蜘蛛、蜂、小女

泡鳴子

栗の 下陰 すぎゝゝに
うつり縮みて、飼牛 の
あへぎ も 迫る 晝の日や、
ひかり 烈しき庭の面、
むしろ に もゆる 干梅 の
にほひ も いとゞ 暑くして。

南の風 の しめり さへ
蒸しのぼりけん、音なくに、
あをき 草葉 の おのづから
うちしな垂れし 軒端 には、
呉 の はとり か、さゝがに の
細き糸 そば かけ渡し。

千重に　八千重に　たて横の
ひかる　あや絹　肌すきて、
涼しき　空に　やどる身の
いとも　妙なる　たくみをば、
わが　あめ地の　着下だせる
御衣の　裾とも　ながめてん。

こゝに、たま〱、一匹の
蜂は　鳴きつゝ　飛び來たり、
この巣の　端に　捕はれつ。
おもひ設けぬ　わざはひを
避くる　と　すとも、なか〱に、
その羽　も　足　も　得動かず。

この　あり様を　見すまして、
蜘蛛　は　忽ち　飛びかゝり、
待ちし　ゑじきを　食らはん　と
こゝろ　ばかり　は　あせれども、

敵の　ちからの　強くして、
互ひに　競ふ　かち負け　や。

その數　未だ　何れとも
わかち兼ねたる　まのあたり、
一もみ　揉みし　はずみ　にて
蜂の　なは目の　解けにけん、
うなりの　聲も　やすらかに
いのち　かゝへて　遁れけり。

小蜘蛛　は　ひとり　殘されて、
おそれ　の　淵に　のぞむらん。
高き　わが巣を　定めなく
馳せめぐりてし　その末　に、
あらたの　糸を　釣りさげて、
そで垣　近く　舞ひ下だり。
折しも、清き　乙女子　が

手洗ふ　水の　しづく　にて、
苔さへ　深く　うるほひし
つは蕗の　根を　よぢのぼり
その葉ぞ　まろき　ほとり　より
蓑虫の　ごと　捲き閉ぢつ。

おのれ　身づから　うつゆふ　の
之に　籠りし　程もなく、
かの　旅蜂　は　一むれ　の
従者を　伴なひ　もり返へし、
もとの　軒端　を　さまよへど、
ぬしなき　網の　懸かる　のみ。

かすかに　のべし　玉の緒　の
一すぢ　殘る　つたひ來て、
かしこき　仇の　隠れ家　を
よりて　たかりて　つき刺しつ。
おのが　怨み　を　報いけん、
勝どき　あげて　飛び去りぬ。

手すり　に　よりて、乙女子の
小き神　を　見送りつ、
こゝろ　は　何を　悟りけん、
世にも　めでたき　口びる　の
くれなゐ　結ぶ　あひだ　より、
ゑみ　の　花びら　こぼれけり。

鑛毒被害地の人々に代りて詠める

池　鳴　子

わが　あめ地　の　神　ならば、
鎔かせ玉へや　この　歎げき。
いくる蟲　の　まなこ　にも、
毒　を　浮べて　ふる　なみだ。

憂きは　あまねき　ありさま　を
わたらせ川に　うつし見よ。
みな底　さへも　澄めれども、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

あゆ子 さばしる かげ 見えず。

遠山かすみ 立ちこめて
春 の こゝろ を うながせど、
いのち 涸れたる 堤 には
花 いち輪 も 咲きいでず。

見わたす田のも あかゞね の
いろ に まじりて あを麥 や、
民 の うれひ を 顯はして、
さび行く 魂 の なごり かと。

いき とし 生ける 萬物 の
そだつ もとゐ の 腐ざりては、
ひばり 子 を 生む ところなく、
蝶 の 狂はん 菜のは なし。

おきな は 飢ゑ に 叫べども、
若者 之を 救ひ得ず。
鍬 投げうちて うそぶければ、
毒氣 は 骨 に せまり來つ。

こゝろ しら歯 の 生むすめ が
とつぎて 抱く みどり子 も、
くされ ば 深き 竹の根 の
もろき を 知らで ゑむなめり。

かくも つみなき 時より し、
共に 受くべき 樂しみ を
おもき みつぎ に 且は又
奪はれて こそ なやむなれ。

數萬町 の 荒野 をば
まよふ 人々 かへり見で、
おのが利 を のみ い貪ぼる
惡魔 ひとり は 忍びなん。

あはれ、貴とき人間 の
價ひ なみして、こがね ゆゑ
身 を 賣る 者 の 多ければ、
世 に 訴ふる ところ なし。

わが あめ地、の 神 あらば、

聽かせ玉へや　この　歎げき。
幾百萬　の　まなこ　にも、
毒を浮べて　降る　なみだ。

立ちん坊

一　賤　夫　記

下等勞役者中の殊に下等なるもの、蓋し俗稱立ん坊と呼る者の外他にこれあらざるべし。彼等は一般に其手に職と云へる素養なく、多くは怠惰放逸にして一定の規律に從つて其業務を執る能はず、唯だ酒を嗜み賭博を事とし獸慾を逞うし安逸をのみ貪りし結果、親戚故舊に棄てられ知己朋友に顧られず、終に墮落に墮落を重ね、自ら立ん坊の境界に墜るの止を得ざるに至れるなり。彼等は其境遇に墮落して僅かに既往の我が過失を回想し、心竊かに後悔の念に堪へざるものあるべし。然して其悔悟の又更に益なきを思ふや、勢ひ自暴自棄の感にあらずんば失望落膽の念切に、酒を呼び財を賭して、僅かに憂愁の氣を散じ怏鬱の思を遣らんとして、益々身を窮苦困厄の深淵に投じ去り、遂に再び普通社會の人たるを得ざるに至る。彼等は辛うじて一身の糊口をなし得るもの、固より妻子其他の眷類を有し一家を有するもの、稀なるは論を俟たず。多くは本所花町、小梅業平町、深川富川町四谷新宿淺草町、本郷曙町等の木賃宿に宿泊し、然らざれば墓地其他社寺の床下等、極めて警吏の注目を逃がれ得べき場所に、乞丐の徒と共に一夜を明し、少しく勝れるものに至ては、市中に於て貧民の巣窟たる、芝新網、四谷鮫橋、淺草萬年町を始め越中島近傍、押上、龜井戸近傍の如き僻隅に、所謂棟割長屋なるものを、日々の所得より壹錢五厘乃至二錢の家賃を出して借入れ、汚穢なる豚小屋に均しきうちに起臥し、一着の衣服に數人の所有者あり、一個の鍋釜を以て五六戸の用を辨じ、一枚の四幅蒲團に四五人の家族寒を凌ぐの奇を演ずるなり。

立ん坊なる語は、蓋し彼等に最も適當なる稱呼と云ふべきか。彼等は拂曉其宿を出で朝仕事と稱し、近在近村の農夫が夜を徹して、多町其他の青物市場に運搬し來る野菜を積たる車を挽ん者と、皆要所に其車の到るを待り。東は吾妻橋兩國橋、北は千住坂本王子道、西は板橋街道目白新宿の口々を擁して、依頼者の來るや爭て之に應ぜんとし、皆其價を競ひ、一里六錢を普通とし、時に四錢三錢を以て、一里の道程を行ものあり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は彼等の中に在て最も精勵なるものにあらざれば、最も究したるもの、現に朝仕事をなさゞれば朝飯を食する能はざるものに限れり。故に其數も從て多數とは云ふべからず。午前五時六時頃より日本橋近傍其他各所の市場揚場等に次第に其數を増し、問屋の軒下に停立して客を待つもの多く、立ん坊の名實此に完きを致す。立ん坊程、服装奇にして不同、かつ不潔なるものはあらざるべし。彼等が十中の八九までは、襤褸を纒ひ然かも縷々其肌を顯はすもあり、淺黄色の股引は膝の邊に色の異れる膏藥に似たる接布ありて、所々泥に塗れ油に染み、其上着は印袢纒の裏面を表面に縫ひかへ、文字及印形の如き轉倒前後左右し、垢積んでその光澤黑み、塵埃肩の邊に堆く、敲く時は煙を生ずべく、其下着は鼠色せる古莫大小か、毛の拔け去りし綿フランネルならん。巡査兵士の古洋服の所々裂け破れたるを上着とし、古袷を下にして裾をかゝげたるもの、或は單物、羽織、合羽、甚だしきは大風呂敷に類せるもの等、身に纒ひ得べきものを以て僅かに其肌を蓋ふと云ふも、其實悉皆蓋ふとは云ふべからざる樣にて、所々を紐の如きものにて縛り、亦は所々を結び合せなどして、恥を隱すに止まるもの等、時に人をして亞弗利加内地の蠻人を見るの感あらしむ。

此等の輩は數月否な數年未だ曾て入浴せざるもの少からず、從て彼等の身躰皮膚は人の皮膚と云はんよりも、寧ろ樹木の外皮とも云ふべく、銅黑色を呈したる上所々に點々腫物を生ずるもあり、又は垢のうちに血の沁みたる傷痕を印するもあり、最も嫌ふべきは彼等の衣服に蔓延せる汚蟲則ち虱又南京虫の類にして、血に渇ける虫は、絶ず其咬噬の勢を逞うし、群をなして這ひまはり、累々重疊繁殖して其卵子數千數万に及ぶ。然れば彼等の如き暴男も、さすがに其攻擊に堪へず、或者は指頭を以てこれを殺戮するの迂遠にして緩漫なるより、齒を以て其衣布を噛み、或は石と石との間に挿み力を極めて押潰すに至る、故に彼等が街頭に停立せる間、其為す所の事は、虫類の殺戮のみ。彼等はかく不潔を極めて顧みざるがため、一種云ふべからざる汚臭を有するもの多し。」

以上記載せる事實に徵し、人或は立ん坊が食物の食ふに堪へざる、則ち汚水を飲み腐物を口にするものならんと想像推察するものあらん。然るに彼等立ん坊は、其食物に於て最も奢

るものにして、恐らくは時に中等社會に勝るの美味を口にし、一汁二菜は、もとより六七種の美菜を前にし、數瓶の濁酒燒酎ブランデーに陶然として醉ふものあり。彼等は其衣住の二途に於て一の快樂を有せず、實に有する能はざるがために、此に最も得易き口腹の快樂を心の儘に貪らんと欲する、蓋し理無きにあらざるなり。彼等は一日の所得少なくも二十錢を下らず、多きは五十錢乃至七十錢を數時間にして得るも、敢て珍しとせざるなり。然れば彼等にして其自暴自棄の念を絶ち、其卑惡なる嗜好を制し、精勵安逸を欲せず、謹直我慾を抑し得て、貯蓄の心だにあらしめば、其悲境を脱する決して難からざるも、彼等の多くは覺悟此に出でずして、其得るが儘に露店に餅を食し、酒店にコップ酒と云ひ升酒と唱へたるを飲み、有るが儘に浪費して顧みず。故に黄昏なほ數十錢のあるあれば、其宿泊料を殘し、明朝の飯代を引去りて剩す所は悉く擧げて口腹の資とす、故に彼等は唯だ口腹の慾を飽かしめんが爲めに、生存するものと云ふも過言にあらざるなり。彼等は他の日雇人足と異り、雨天に遇ふも唯だ自己の少しく困難なるのみにして、其業を休止するとなし。故に彼等は今日に失ふも明日得るを預望し、毫も蓄財の念なければ、もし一朝病に罹る時の困難は、實に名狀し得べからず。衣服住所に平素意を用ひざる彼等が、其塲合に臨む時は、木賃宿を逐はれ、其日借の家を取られ、其負債ある時は、寒氣を凌ぐべき一枚の上着を奪はれ、身に一錢の貯なく、さりとて病苦のために勞働もなしがたければ、絶望の餘り水に投じ、木に縊るゝの最後を遂ぐるものなしとせず。彼等は素より敎育なければ、事物の定理を判別するの能なく、一度己が迷信せし事物は、頑强剛愎如何に其理を說き迷を曉すも、決して了解會得することとなし。故に一度此輩の相衝突するや、言論に是非を正さんとはせず、忽ち腕力に訴へて優勝劣敗の實を現顯し、血を流すの蠻風を行ひて敢て怪しまず、彼等は其敵手より蒙りし傷痕の大なるを誇り、他を苦しめ害を加へたるの多々なるを譽とせり。其言語の粗惡にして野鄙なるは、吾人をして耳を蔽ふの感を屢々せしむ。彼等は其知友の交り親密なるに從て、傍よりこれを聞く時は相醜誹罵辱するが如く、間拔と呼び、頓馬と嘲り、畜生馬鹿野郎の如きは、一言一句の終りに加へられ、云ふもの云はるゝ者、共

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

にこれを意に介せず、却て不和の感ある時には其語のやゝ丁重なるが如き事あるも奇と云ふべし。されば交友間の感情も至て冷淡にして、一見舊知を以て相交るかと思へば、忽ちに數年の親友を仇敵となして、憎惡の念を熾にするものあり。彼等は毫も禮讓を知らず、亦た廉恥を思はず、義理を辨せず、金力なる者に頭を下ぐるを以て禮と信じ、喧嘩に打負けたるを恥と思ひ、借錢の云分けを義理と考ふる類にして、他を倒しても己れ先づ立たんと欲するが如き我儘勝手の心のみ抱き居るなり。彼等は虚言は便利のもの、詐僞は得益の手段と心得、居常言動に屢々此の便利得益手段を行ふとが毫も罪惡たるを思はず。彼等實に常感を失ひ殆んど動物質を離るゝの遠かざるを覺えしむ。故に彼等は法律の何たるを知らず、唯だ他人の金錢物品を奪ひ、財物を賭し、人を害する等の事を爲す時は警官のために捕縛せられ、懲役に處せらるゝ丈は承知し居るも、唯だ賭博の二事のみは十人が十人行はざるものなく、飲酒と並びて其慘毒を彼等の社會に逞するものなり。幾度か牢獄に繫がるゝに從て、其嗜好の度を益すとは、賭博者が常に云ふ所、一度此毒に染む時は、我が手足をも賭さまく欲するの念を生ずと。

木賃宿の或ものは眞に賭博宿とも云ふべきなり、彼等は常に警官の侵入に備へ、逃走の道を作り置き、又た同類の一人を戶外に停立せしめ、守衞の任に當らしむる等用心に怠りなく、屢ゝ夜を徹するに至ることさへ少なからず。其結果は破れ布子股引襦袢迄も奪ひ取られ、蒲團の中に蟄居して、一步も戶外に出る能はざるものあり。かくては明朝よりの職業に從事する能はず、百方陳謝して己が衣服を借り、辛うじて其翌日の業を終へ、己が有たりし破れ布子一枚に一錢二錢の金を損料として出すもあるなり。負債は層一層其額を增し、到底償却の望なき時は、最期の手段として他人の物品を盜み取り逃走するもの多し。而して其負債の金額を問へば、多くも二圓を超へず、少きは數十錢にして此の罪を犯すに至る。或は金錢の貸借等より相互に毆打爭鬪の結果貴重なる性命をさへに失ふものあり。かくて彼等は其一生を夢の如く、而も最も煩悶苦惱のうちに費し、腰に梓の弓を張り、手足細く瘠、力全く減滅し勇氣全く衰亡し、眼暗み耳遠くなり行ける時は、憐れ一人の彼を慰藉するものなく、彼の爲めに淚を流すものあ

らず、最終に紙屑拾の類となるものは上乗にして、乞食となり亦は路傍に餓死し、纔々の生命を保つものは養育院の救助をうくるの外他なきなり。立ん坊の末路また憐れむべきかな。然れども彼等のうち少しく遠き慮りあるもの、また積年の迷夢幸にして困厄の爲めに覺破せられしもの、蓄財の念を生じ、謹嚴にして自制の志を抱くに及んで、暫く一方の活路を得るが如く、次第に死地を免るゝの運命に遭遇し、花笑ひ鳥歌ふの樂境、徐々として眼底に映じ來り、希望益々固くなるの日、彼は既に立ん坊の名稱の下にあるものならんや、かゝる輩は恐らく百人中の一人に於て見出され得るものなるべし。

余一夜昌平橋畔を過ぐ、忽ち聞くザンブと響く水音に、最初は何心なく二三歩進み行くと共に、橋下に人の叫ぶ聲あり、投身者あり投身者ありと。余は喫驚足を空にして橋下に走り行ける折しも、一人の職人躰の男同じく此叫聲を聞き走せ來れり。叫びしものは三十間堀下流に繋泊せる一船の水夫にして、彼は余等二人を見るや、再び叫んで云ふ、人あり確かに橋上より投身せり、兩君速かに來て我船に乘れ、然らざ

れば彼を救ふに由なしと。兩人の飛び乘ると共に船は漕ぎ出されたり。夜色暗澹船中に用意されし角燈を以て四方を伺ふも、物の目に觸るゝなし。船夫は棹を余に取らしめ、裸躰となりて水中に飛入れり。百方搜索終に一死躰を右手に抱き、船にかき入れしを透し見れば、これ年齢五十を超えしとも覺ゆる所謂立ん坊の如きものなり。船を陸につけし頃は、警官二名余等を待てり。依て其狀を陳じ、先づ死躰を仰にし水を吐かせなどし、身躰に温暖を加へんために焚火をなし、皮膚を摩擦し、人工呼吸法などを試み居るうち、醫士は來りぬ、遂に彼は一度幽冥に歸して亦再び世に出でたり。彼は何故に其貴重なる生命を塵芥の如くに棄てゝ顧ざりしぞ。彼は立ん坊の境界にある廿三年餘にして年既に五十四の今日までも、車を挽き棒を肩にし重きを負ひて遠に行くの勞働は、一日として苦痛を感せざるなく、未だ嘗て一日の安心快樂を知らず、爲めに彼は他人が貴重する生命は、彼には眞に惡苦を感覺せしむるの媒たらずんばあらず。彼は老ゆるに從て愈々苦惱を益せり。彼は終に死を決せり。彼此夕またゝか酒を叫び、十分の醉を買ひて其退潮なるをも知らず、昌平橋

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

上より身を投じ去て、辛勞多く困難痛苦に充てる境界を去らんとを望めるなり。彼は余等の救助に向て絶て感謝の念を有せざるのみか、却て余輩三人を恨み、恐らくは再び憂愁の巷に出でたるを口惜しと思ひしならん。これ實に余が本年一月某日親しく出會したる事實なり。

九段下、萬世橋、日本橋、兩國橋、神田多町、大根河岸、高輪通、小網町近傍、水道橋、神田佐久間町邊、江戸橋、千住、新宿等其他の往來繁き巷、市場、物揚場等は立ん坊が參々伍々隊をなして群集し其依頼者則ち雇主を待つ所とす。其他晝間十分の所得なき時、彼等は止を得ず夜間各所の縁日場に至り、植木屋の荷を挽き、又は大物を購ひし客の家宅迄、其植木等を運搬するものあるも、これ等は最も其數を尠しとす。蓋し彼等の夜仕事をなすは萬止を得さるがためなり。九段坂、壹岐殿坂、明神坂等の下に立て人力車及び荷車の後押しをなすものは、これ等は一組合を組織し、他のものをして猥りに後押をなさしめず、これ等は多く人力車夫の失敗者なりと云ふ。

花影小談

長汀

○達藝の妙

吾が郷里に、過ぎし頃、藩士某とて能樂に長じ、特に石橋の狂ひ獅子を舞ふに秀でたる人なりしが、此人其齡七十にも餘りて、手足の程も任ならず、起居振舞も覺束なき迄に、老いさらばひて、日々老病の床に、此世の齡の盡きなんとも、遠からじと覺えたるに、或時生前の名殘に、何卒今一度、石橋を舞はゞやと思ひ立ちて、藩主の宗廟なる某神社の能樂堂にて、いよ〳〵此人、一世一代の舞ひ納めをなすことゝなれりき。前シテの樵童と顯じて、寂昭法師に唐土青凉山の石橋の由來を語る所より、後シテの獅子と變化する所まで、其舞臺に顯れ出づるに、橋掛の中は二三の人に扶けられて、足もわなゝに、見る人、いと賴み少く、危ぶみたりしに、軈て舞臺に上りしや、何者か不思議の魔力の、俄に此人の上に加はりしかの如くに、乍ち五體は胖に伸び、四肢は堅く張り、其狀

平生に似るべくもあらず、容姿の構へは、此人なほ若く壮んなりしをり、此舞臺に顯れし日に毫も異ならず、能舞の中にも、動作の最も劇しき、石橋上牡丹に戯むるゝの獅子と題して、獅子圖亂旋の舞樂のみぎん、牡丹の花房にほひ滿ち〳〵たいきんいきんの獅子頭、うてやはやせや牡丹芳、牡丹芳、黄金の蕋顯はれて、花にたはむれ、枝に臥しまろび、實にも上なき獅子王の勢ひ、なびかぬ草木も時なれや、と丈にもあまる猩々緋の獅子頭、振りみだして、左右左左右右と狂ひ狂めく、其有様、これぞ髄骨を衰へ果てたる七十餘歳の老人の所作とも思はれぬ計、見る人目を驚かして、感嘆の外なかりき。さるに暫くありて、万歳千秋と舞ひおさめて、獅子の坐にこそ舞ひ納めて宿りけれ、と舞臺を下り、再び橋掛にかゝるや、體力俄に衰れたらんが如くに、人々に扶けられ、弱々しけに、本の坐に歸りたりとなん。

かゝる類の逸話は、他にも往々聞き及びたるが、今思ひ出でず。思ふに蓋し如斯き所以のものは、彼人、藝道に練達したるの餘り、其藝中に、一個の生命活力を有せるが爲めならずんばあらず、これをや達藝の妙とやいはん。

凡そ藝の何たるにも拘らず、文の何たるにも拘らず、練磨よく此際に臻りて、其中別に我が生命あり、我が活力あるを得ずんば、未だ至妙の域に達すること能はざる也。

○花のもとの俗物

春なれや、千梢万朶の櫻、爛熳として花雲の靉靆をなし、樹下千百の士女を集へて、一日の嬉遊に一年の歡を盡さしむ。これぞ造化花を地に植うるの妙意ならずや。花の下にはた〳〵樂しむべし、只遊ぶべし。咲く花に浮かるゝも、落花の路に踏み迷ふも、花ぬらす雨の雫にそぼつも、朧月夜の花に下臥しするも、行き暮れし山路の花に宿かるも、春日の興、蓋しまた樂しからずや。一家手を携へ、朋友心を和げて、春風花下に逍遙する一日の歡樂には、情愛いや益すの機頗る開け、落花を浮ぶる杯には、呉越も隣交をなす。上野墨堤、花を見るの都人、心暢び躰胖に、喜び滿ちて、憂苦何の闕はる處ぞと笑ふ。嗚呼花に浮かれ、花に歌ひ、花に酔ふは、自然の供する人生春天の樂、人よ何ぞ此樂を盡くさゞる。吾人は花下酔歩蹣跚の客を目して、敢て通なりといはず、たゞ彼一種

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の人間、故に花下に事理を嘆じ、愛憤を生じて、此樂に入らざるの徒を稱して、俗物とはいふ。

○人を見るの遠近と大小

長州の村田清風が詠に

　來て見ればきくより低き富士の山
　　釋迦も孔子もかくやあらなん

といへる、また獨逸のショッペンハワーが、人の肉の形は近接するに從つて大きく見ゆれども、之に反して其心の形は近づくに從つて小さしといへる、意義相通ずとやいはん。實に其いへるが如くに、今の世に某といへば、名を聞くのみにては、いみじき人。豪者よと想像せらるゝが、一度び其人の謦咳に接すれば思ひしよりも劣りて賤しく見ゆるが多し。之より推せば、孔子も釋迦もかくやあらん。蓋棺の松陰、西鄉などいへば、近代の英物として今人讃稱する處なれども、兩人なるものをして、猶今日に在らしめなば、必ず京童の笑となる行ひも多からん。

されど此說の一應の道理は未だ深く通ぜず。初め劣りて見ゆる人も、度々之を接し、いよ〳〵之に接するに及んでは、彼が美質長所の漸々に認識せられて、或は賢く、或は尊く、或はゆかしく、其頗る慕ふべき性德を有せるに感ずること多からん、一見愚鈍に似て、再見三見、漫に其尤物たるを識るもの、亦尠きに非ず。人の心の形は、必ずしも近接するに從つて漸々に小なるものに非ず、多くは却ていよ〳〵大を致すものなり。一見名を聞きしよりも低き富士の山も、いよ〳〵之に接し、遂に其膚に觸れ、白雲を踏んで、其頂に上り、遙に四圍を瞰下睥睨するに及んでや、芙蓉峯の大を觀ずると更に加ふといふに非ずや。

寄ヒポクリーンの泉
祝新婚

有美

往昔人の女にヒレ子なるものあり。其子某獵神ダイヤナの矢にあたりて斃る。悲痛禁じ難く慟哭措かず、遂に流るゝ所の涙、その身を溶して一大噴泉と化するに至る。之をヒポクリーンの泉と稱ふ。詩神につけるものなりといふ天馬ペガサス、常にこの邊に來て飲み、時に詩美神亦自ら是所に下臨したまふ。かゝる來のあるも、地なるものにあればぞ。セリスは地の女神なり。今玆に涙の人にして又アセナの類なる某子、某氏に知られて之に嫁ぐ。由てこの詩あり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

湧けよ泉　噴けよ泉　躍れよ泉
見よ　ミューズの女神　ヒポクリーンの泉
三三三　腕をつらねてたち
天馬ペガサス　また空をかけりて來る
今やなし　暗涙に咽べせるの身ヒレ子は
たゞあり　滾々として盡きざるの流れ
この妙化　何處よりか來れる
いふをやめよ　母人セリスのあるあり

古事斷片（二）

◎大工といふは内匠といふ言葉より訛り、左官といふは、昔堺匠の大工と同じく宮室の造營に受領として、何の目（佐官）などいひしが、訛り傳れるなり。昔は無位無官のもの大内に出入するを許されざりしかば、商工の徒も受領したりしなり。」

◎愚頓の者を野郎間といふは、昔野郎松勘兵衛といふ人形遣の頭ひらたく色靑黑き、いやしげなる人形をつかひならして、之をのろま人形といひしより起りしといふ。

[illegible]の二家臣に御下賜ありしとき、三[illegible]に、壬生忠岑が、

◎老人の杖を鳩の杖といふは、鳩は咽ばざる鳥なれば、老人の痰せまりて咽ばぬやうの呪咀にいふなり。支那漢の國にては、仲秋八月に、朝廷より八九十歳の老人に杖を賜ふの儀ありしが、杖の端に鳩の形を作り附ありて、鳩杖といひしとぞ。

◎風呂敷といふは、元は風呂塲の揚所に敷く、巾廣き布にて、浴衣にひとしきものなりしなり。京傳の骨董集などには、湯歸りの客、風呂敷を抱へて歩く様を圖したり。今物を包む布を風呂敷といふ、形彼に似たるが故に其名を假りたるが、後彼はすたり、此は重寳に用ゐられ、遂に其名を專にせし也。

◎日本に茶の樹を植ゑ初めしは、人皇八十三代土御門院の御宇に建仁寺の開祖榮西上人、宋より茶の種を得て歸朝し、明惠上人此種を栂の尾に植ゑたり。之より宇治、仁和寺、葉室などに移し、遂に全國に普及したるなりと。

◎茶道は禪なり。其禮法は禪家隱遁の躰を模し、質素閑靜を學びたるものにて、宗匠をも和尙といひたり。

◎足袋の古義は蹈皮なり。むかしは足袋を皮にてつくりしものなり。皮足袋は今より二百三四十年前に廢りたり。

◎古今集中第一の名吟は何ぞと、後鳥羽院の俊成、定家、家

隆の三歌匠に御下問ありしとき、三卿ともに、壬生忠峰が、

ありあけのつれなく見えし別れより
暁ばかりうきものはなし、

を記して答へ、なほ俊成三位は貫之が

むすぶ手の雫ににごる山の井の
あかでも人に別れぬるかな

といへるを添へまゐらして、奉りしとなん。

◎這入るといふ語は、我國太古の祖先が生息せし穴の入口を出入するに、口窄き故、這ひたることより起りて、今世まで傳はりたるなり。いと古き語なる歟。

案山子迺舎諸社中詠草（承前）

池袋清風大人評點

、雨中鶯　東京第二社の某

もえそめし岸の柳にふる雨の烟のうちにうぐひすのなく

評 此所縁辭をよく用ひたり即もえそめしは柳にも烟にもかゝり又柳も雨もけぶるといふ故に靄然たる雨中烟の如き柳蔭より清美なる鶯聲を聽く亦一種の感あり

、、藤尾春江子が　淋しさにかなづる琴もうちしめ

り更ゆく夜半に春雨ぞふる　とよめる歌を聞きて

伊丹義衞

雨の夜の琴のしらべのゆかしさにめに見ぬ人も戀しかりけり

評 春江子が彼詠をよみしは僅に十五歳許の優美なる少女の時にて非凡の歌才ありし又此詠者は二十歳許の好男子にて性質の如き優美の歌を詠ずる事我社中に秀でたり共に京都の我宅に折々來りしも遂に互に面會せざりしかして春江子は他に嫁して歌學を休み青年多望の斯詠者は早世す道の爲惜むべし

、、春の歌の中に　武藏市村高彦

月影もおぼろにうかぶ玉川のやなぎの陰にはるさめぞふる

評 春雨は滿天陰るが常なれど時には薄くくもりて朧月の影ながらふる事あり此詠は其景をとめてよまれしなるべし春夜の靜和なる眠るが如き月影は水流に浮びながら堤上の柳陰春雨霏々たるいと可憐の景也

、、祠頭春雨　東京高原照彦

なつかしき小草ももゆる野の宮の垣根の水にはるさめぞふる

評 野の宮は山城の嵯峨にありむかしは野中の一小祠にて纔らすに小柴垣を以てしいとなつかしき所なりし由名所圖繪抔にも見ゆ今は廣濶たりし嵯峨野も人里となり其間に竹林多し評者先年京都に遊て住ける頃行て捜したるに小暗き竹藪中に小祠のみ名殘を止めて見る影もなくなりしはいと口惜き心地せり此詠は昔の景を想像してよめるもの垣根の水など出されいとも幽美の感あり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時文

◎國文學大綱第一卷 契中阿闍梨　大町桂月著　大日本圖書株式會社

大月武島鹽井の三文學士、英米の文豪傳に倣ひて、國文の大家を古今に亘りて傳述せんとす。第一編は桂月氏の筆に成れる契中阿闍梨なり、此名僧が國學復興の木鐸警鐘として德川時代に傑出したる事蹟を詳叙し、水戸光圀、長流等の事蹟をも併記す。その評論の筆に至りては、皆か首肯し難きものありと雖も、其記事は以て國文に志あるものを稗益するに足れり。

◎僧服改良論　三浦梧樓著

僧服の日々華美に流れて、佛祖の意に反するもの多し、將軍夙に佛に歸して、又この弊風を慨する年あり。たまく英照皇太后陛下の御大葬に際し、當局華美なる僧服を着て之に參列するを制止せしより慨更に慨、この一論を草して、僧服は凡て佛祖の谷たまひし木蘭色の簡服に歸らんことを希望せり。この論廣く行れて、華美を退くることを得ば宗教界の一慶事なり。

◎新著月刊第一號　丁酉文社

早稻田の文士丁酉文社を組織して、小說雜誌新著月刊を起し其第一號を出版せり。之に筆を執りたるは水谷不倒、泉鏡花、島村抱月、後藤宙外、春の舍主人なり。不倒の『無目兒』題目の主意我等には何れの邊に存するやを知らず。これ一箇喜劇の材料を執へて、面白くものしたり。鏡花の『化鳥』は、徒に奇想を構へて奇文を弄したるの嫌なきを能はず、此文士近來此弊多し。抱月の『しろあらし』宙外の『無相庵』ともに一口の談話、取り上げていふべきふしもなけれども、文は流石に巧なり。春の舍主人の『二葉の楠』は近松の『吉野都女楠』より割り出したるもの、夢の巻、現の巻など〻區分して、あまりに巧めり。

天來の雨聲鳥語集は、俗謠に俳文を交へたる園の子の如し。吾人は之を新体詩として滿足することを能はず。雜錄中の數篇、讀むべく、特に柳浪の苦心談聞くべし。

◎小說八家選　博文館版

文藝俱樂部の臨時增刊「小說八家選」中に就て二葉亭の『夢がたり』露筆の精鍊なるを見るべく、貧美子の『心づくし』閨秀小說に見えたるもの〻續きにや、露文美はし。露伴の『當世外道面』紅葉の『戀のぬけがら』は共は八年以前の作、之を見て今兩子を思ふときは、其文章の進境如何察せらるべし。綠雨の『百鬼行』これも先年の作、其苦々しき筆鋒にて、華族を罵ること酷苛。美妙の『惡の巻』二十三階堂の『開運札』共に見るべし。要するにこの八家選は、大家顏のものを寄せ集めたることとて、いづれも出來宜しき方なり。

◎新小說第四號　春陽堂版

口給のコロタイプの美はしさいはん方なし。美妙の『可憐狂』忠實なる老父とあばずれなる娘、義心ある俳優等が、朝飯時から夜の十二時頃に至るまでの間の波瀾轉翻の物語なり。美妙近來小說に出精し、而して其筆はよく熟し、到底これ凡手の伍に非らざるなり。近作多く前年の婉麗優美を欠ぐと雖も、勉めて下層社會の人情を描き、砂中金を求むるに於て、頗る稱すべきなり。小杉天外の『かげ皿日記』格別のものに非す。子規子の初作小說と稱する『花枕』これ學究一の御伽評のみ、機餌の『出雲阿國』治なき文字に俠女が事蹟を讀むべし。雜錄中の露伴が『反魂香』に幕末の名士の相貌を想察する處この人の識見實に凡に非ず。

◎小御門　依田學海作　博文館版

稗珍小說中の一なり。改良脚本と稱すと雖も、其改良の實何處に在るやを知らず、夫れ或は實傳なるをいふか、將たまた大和言葉を用ゐたるによるか。其銓議は扨て說き、南朝の忠臣師賢卿、主上に代りて雖に赴くの事蹟に加味するに一美人の貞烈を以てするの好劇題なり。附錄の『辨内侍』『尹良親王』、共に南朝の事蹟談讀むべし。

◎海軍實話　吾妻大尉著　春陽堂版

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎海軍壽話　　若林大尉著　春陽堂版

若林海軍大尉の海軍隊の日常の業作を畫に寫し、之に說明を加へたるもの、以て海軍の諸氏日夜如何なる事を行ひつゝあるかを知るに足る。特に此海國の少年に見せて、大に興味を覺えしむべきの眞御伽本なり。

女界文壇雜俎　四月上中期

◎婦人の職分(山路彌吉)	婦人新報　第貳拾七號
◎十善戒と家庭教育の關係	十善寶窟　第八十五輯
◎女子教育に對する日本人の思想(ホーイ夫人)	ジャパン、エバンゼリスト　第七號
◎助產婦の需用供給に就て(古川榮)	助產の栞　第十一號
◎女子大學の設立に就て(近衞公爵)	教育公報　第百九十號
◎女子教育振起策(成瀨仁藏)	同
◎婦女の龜鑑	報知新聞連載
◎女子教育論(柳村居士)	基督教新聞　七百十二號
◎ことの濱づと(下田歌子)	太陽　第三卷第七號
◎女子の本位如何	時事新報　四月七日

片　士

嶺にちる花は谷なる木にぞさく
いたくいとはじ春の山かぜ

◎各府縣に高等女學校なかるべからずとの議論兩三年前より文部省内に起り居りしが、近時いよ〳〵其需要切迫し來りたるを以て、文相始め省中の有力者は專ら之に關する取調べを爲しつゝあり。就ては明年の帝國議會には、文部省より之に關する提案もあるべしと新聞紙は傳ふ。

◎蜂須賀文相夫人隨子君　女子高等師範學校卒業式に女子教育意見書を寄せて、諸生を訓するや、或は文相は夫妻共同教育に心を用ゐるの美を稱するあり、或は又之を面白がらぬもあり。兎に角如斯は破天荒の一事といはざるべからず。

◎合衆國　にては婦人にして內外科醫師たるもの四千五百五十五人ありといふ。

◎女子高等師範學校　明治三十年度入費豫算額の議會を通過したるは貳萬九千六百九十八圓六十壹錢四厘なり。之を帝國大學の五拾貳萬九千貳百八拾參圓參拾四錢參厘に比すれば十八分の一强に當り、また之を高等師範學校の七萬七千六百參拾九圓五拾八錢五厘に比すれば二十五分の十弱に當る。

◎統計上　歐洲諸國中伊太利、セルヴイア、希臘を除くの外は各國とも女子の數男子に優れり、これ蓋し歐洲人は交通貿易殖民等盛んにして男子の本國を去れるもの多きに由らずんばあらず。

◎明治二十八年度全國の統計　によるに、現在尋常小學就學の兒童は男一百九十五万四千八百九十六人、女一百十一万一千一百七十三人、尋常小學卒業生男九十二万三千二百人、女三十四万八千八百人。不就學兒童男八十七万六千九百三十二人、女一百八十六万八千一百四十七人といふ。

◎萬朝報　の文學記者は紫琴女史果して女性なるやと疑ひしが、實に其然るを發見して、これ有數傑出の女作家として敬重す。紫琴女其名は古在豐子、京都の人、頗る文字の才ありて、甞て本誌に編輯を主幹したるとあり。

◎大隈外相　日本女子大學校の創立會に男女兩本位說を論ずるや、時事新報『女子の本位如何』の說あり。主旨に曰く女子教育の目的家庭の本たる母を造るには正室たるものを教育するに外なかるべし。然れども一方には柳橋二橋の邊には恰も側室の學校ありて、現に其候補者を製造しつゝあるもの少からず。されば

◎正室教育　の目的は甚だ可なり、然れども單に正室の善眞なるものを得たればとて、この側室ある以上は家庭の風儀を變ふると能はず。現今の日本上流社會などを見れば家庭に本位の單複は男女の關係にのみ止まらずして、女性の一方に複本位の行はるゝを見るべし、而も其複本位は正室と側室との兩者のみに非ず、外にも臨時雇の侍女あり、別莊の留守番兼任の外妾ある等、恰も金銀複本位の外に、白銅も銅も共に本位の法貨として認められ、雜本位の通用するに似たり。

◎故にこの　雜本位家庭制度の可否は先決問題に屬するに於て、之を顧みると甚く、女子教育は家庭の爲めなりといひながら、其家庭に最大嚴重の問題たる一妻多妾の得失如何に就ては恰も忘れたるが如く、之に論及するものなきこそ可笑しけれ、男女複本位制度を定むる其前に內室の單複論を決すべしと論じて得て妙、而も亦

◎日本女子大學校　設立贊成者の多數の肺肝を貫きて、冷汗を催さしむ。

◎女鑑　の加茂之満氏女子大學の設立を尙早しとなし、女子高等教育の開設に先だちて先づ普通教育を盛大ならしむべしと論ず。

◎廣島高等女學校　の生徒家政科、裁縫科等に及第點を得るもの多くして、体操科には悉く滿點を得たりとて、女德に欠ぐる處ありとして傳ふるものあり。然れども吾人は容易に此事實を信じて、彼非難者に附和すると能はず。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

時報

◎日本女子大學校の創立委員

日本女子大學校は四月上旬麴町區大隈伯邸にて開會せられしが出席者は近衛公爵、大隈伯爵、岩崎彌之助、澁澤榮一、兒島惟謙、廣岡信五郎、土倉庄三郎（內海忠勝、住友吉左衛門の二氏も委員なれども欠席）の委員に松方首相、蜂須賀文相の諸氏なりしが、諸委員は近衛公爵を委員長に推選したれども、同公爵は上院議長、學習院々長併に諸協會に長たるを以て辭せられ、よりて副委員長北畠治房は當分委員長の職を兼れ、追て黑田伯を委員長に推撰せることに決したり。當日は賛成者募集、校舍建設の計畫、敎授上の方針等に付き相談ありたりといふ。

◎孝女受賞

新潟縣越後國南魚沼郡三角村
佐藤椋太郎母
駒形さく

資性温順貧窶ノ中ニ在リテ多年舅姑ノ病ヲ看護シ飯櫃紡績左右違フコトナク貞實夫ニ事ヘ能ク子ニ訓ヘ夫ノ兄嫂ヲ待ツニ友愛ノ道ヲ以テシ夙夜紡織樵耕等ノ業ヲ勤メ節儉以テ衣食ヲ足ス閨門雍睦シ家道亦興ル洵ニ奇特トス仍テ明治十四年二月七日勅定ノ綠綬褒章ヲ賜ヒ其善行ヲ表彰ス

◎大坂の綜藝種智院紀念會　弘法大師の遺志を繼ぐと稱して大坂江戶堀北通二丁目に興したる綜藝種智院にては、去る四月三日紀念會を行ひたり。同日午前十時式を始め院主佐伯覺燈師一場の演說をなし、生徒の答辭來賓の祝詞あり。東寺の長老泉涌寺の住持にして、古義眞言宗の管長たる大僧正鼎龍曉師も臨場あり、餘興として能樂數番を催ほしたり。同院の生徒は何れも同地良家の處女にして、妙齡なるが多きに居れりとぞ。

◎女子文藝學舍卒業式　島地默雷氏の設立にかゝる東京麴町區中六番町の女子文藝學舍第七回卒業式は、四月十一日午後一時執行し、證書授與式了りて、更に女禮式あり。

◎山梨英和女學校卒業式　四月三日午后一時より同校內講堂に於て開かれたり。

◎横濱フェーリス女學校卒業式　四月六日卒業式を擧行したる同校の卒業生は普通科にて川村てい、加藤よせ、服部春代、淡中藤枝、睦路つやの五名なり。

◎東京府高等女學校第十一回卒業式　は四月五日擧行す、卒業生は六十五名あり。

◎明治女學校　は四月十三日府下北豐島郡巢鴨村新校舍に移轉し、同十七日卒業式を擧行す。卒業生は石川貞、春木つぎ、沼宮內たみ、高橋たま、中山つゆ、松本まさ、畑山きし、佐藤よし、飯島すて、今村梅代、服部こう、高橋まり、山口たつ、阪牛いく都合十四名なり。

◎東京女學校卒業生　卒業式は三月廿七日擧行、卒業生は早川いく子、下山ゑん子、箕村よし子、野澤なのゑ、藤崎さだ子、山口やへ子、須田かさ子、尾崎なみ子、糸川はつ子、森　つね子、毛利千代子、の十一名なり。

◎大阪尋常師範學校女子部卒業生　去月三十日擧行したる同校の卒業生は野村はつ、勝野こま、堀口みつ、館野しげ、香川貞千代、鈴木總枝、津守糧、荻野住江、向山りく、天岡つき、井澤小糸、澤田なほ、千賀　辰、吉岡かく、廣瀨、上田りき、館野　銑、岸上はなの十八名なり。

◎女子高等師範學校　にては從來の生徒定員百二十名を增加して百六十名となせり。なほ同校にては自ら英語科を擴張して、華族女學校敎諭津田梅子氏、新學期より此科に教授することゝなれり。

◎福島高等女學校　は四月十七日を以て新設開校式を擧行したり。入學生徒は既に滿員となれるよし。

◎大阪婦人慈善會　は是迄一定の場所なく臨機各所を借り受けて開會し來りしが、本年よりは博物場內の茶室を永く借り受くる約束整ひ、同所に事務所を設け、春秋二回づゝ開會する事となれり。尙差向き本月中に印度飢饉の義捐金を募集する爲め、開會する由、因みに記す從前は婦人のみ事務を執り、諸般の準備に差支多かりしにぞ、今回廣岡信五郎、藤田文助、松井某（鴻池內）の三氏に常務を囑托せりと。

◎瓜生いは子逝く　福島瓜生會の長として慈善家の聞え世に高き瓜生岩子は四月十九日を以て逝けり行年六十有九

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

進步黨々報

毎月二回 一日、十五日 不要郵税

定價 一冊七錢●六冊(三ヶ月分)四拾錢●十二冊(半ヶ年分)七拾八錢●廿四冊(一ヶ年分)壹圓五拾錢

我進步黨が松方内閣を援けて弊失累積せる伊藤内閣の後を善くせんことを努めたるは、世人の普く識認する所なるべし、殊に、猜妬妨障の重圍中に立ちて、年來の難問たりし言論の自由を洞開し、且、幣制改革の擧を翼成して財政上の新生面を開きたるが如き、與衆の共に後人に傳へて永く記憶すべき顯著の効績なりとす。然れとも是等は單に我黨の方針を遂ぐるの端緒たるに過きず。其の眞に之を全くして所謂立憲政制の美を成し、益々松方内閣を督勵して内、民力の發達を圖り、外、國威の宣揚を期せんには、我黨たるもの、今より雄大の運動を爲して議院に絶對的過半數を制するの地を作らざるべからず。是に於て、我黨は曩日代議總會を開きて其運動方法を熟議する所あり、其の一端として先つ**進步黨々報**を發行することに決し、來る**五月一日**を以て其の第一號を出版することゝ爲せり。

黨報の觀容實相に就ては、從來經驗を具するの人々相集りて、今正に之れを案定しつゝあれば、其の初號刊行の日、必らず**政界に異彩を放ち世人を聳動する**ものあらん。今は、故らに之を鼓吹するを避けんのみ。

◉黨報は**前金**にあらざれば一切發送せず。前金盡れば、發送を止む。
◉爲替宛名は進步黨々報局内門馬尙經にて、拂渡局は芝口郵便支局なり。
◉郵券代用は五厘切手にて一割增とす。
◉廣告料は一行拾錢、半頁四圓、一頁六圓なり。

明治三十年四月

東京市麴町區内幸町一丁目三番地

進步黨々報局

自由黨々報

第百參拾一號 明治三十年四月廿五日發行

◯第十議會自由黨代議士報告書

◯財政參考諸表

◯第一表 明治三十年度歲入歲出豫算決定額◯第二表 明治三十年度歲入豫算◯第三表 明治三十年度歲出豫算◯第四表 明治三十年度歲入内譯◯第五表 明治三十年度歲出内譯◯第六表 明治廿九三十年度歲入歲出比較◯第七表 既定繼續費◯第八表 三十年度新定繼續費◯第九表 新舊國庫補助費額◯第十表 既定豫算外國庫負擔額◯第十一表 三十年度新定豫算外國庫負擔額◯第十二表 公債支辨經費豫定額◯第十三表 明治廿八年度國庫剩餘金使用額◯第十四表 明治三十年度各特別會計歲入歲出豫算◯第十五表 自明治二十九年度至同三十八年度十箇年度間歲入歲出概計額◯第十六表 自明治三十一年度至同三十八年度八箇年度間歲入歲出概計内譯◯第十七表 臺灣歲入歲出比較◯第十八表 自明治三十一年度至同三十八年度一般歲計過不足及臺灣歲計不足對照◯第十九表 償金領收額及軍備擴張費額對照◯第廿表 第十議會提出二十九年度歲入歲出豫算追加◯第廿一表 第十議會提出二十九年度各特別會計歲入歲出豫算追加◯第廿二表 自明治二十九年度至同三十八年度十箇年度歲入歲出概計額◯第廿三表 自明治二十九年度至同三十八年度十箇年度間歲入歲出概計額◯第廿四表 前内閣現内閣財政計畫比較◯第廿五表 國債償還元利豫定額◯第十議會議案經過錄

東京芝公園第五號地二番

自由黨々報局

大日本

廣告!!!『大日本』大擴張!!!

『大日本』嶄新なる政治雜誌にして生れて七閱月、社運隆々として昇る、茲に本社を愛育したる滿天下の愛讀者諸君に向て深謝すると同時に本社は更に本誌に大擴張を加へて以て益々諸君の鴻恩に酬ゆる處あらんとす。

大擴張の要點

(一)大に世運の進歩に伴隨せんとするが爲めに、從來の每月一回を改めて二回とし五月より五日、廿日に發行す。

(二)次號より從來の定價八錢を改めて六錢と爲す、堂々平として加之も最も廉價なる只一の政治雜誌なり。

(三)常に嶄新なる歐米の新畵を附して口繪とし又本社獨特の政治的狂畵を添ふべし。

(四)大勢欄は從來『大日本』が大に他雜誌と異なる處を示したるものなるが更に記事を改良し、世界の大勢、細大漏す處なく報道すべし『大日本』の大勢欄に注意する諸君は必ず世界の大勢に後れざるべし。

(五)小說欄と史傳欄とを增設して特に內外著名の傑作を掲載すべし。

讀者諸君刮目して擴張後の大日本を審判せよ。

『大日本』要項

○世界の大勢最近世界の活歷史○社論獨立不偏『大日本』の主義を明にす○寄書諸大家の名什○漫錄津々可味○小說拈華擲美滿幅の光彩神を呼び鬼を弄す○史傳風あり雲起る滄波來つて天地靑の概あり○評論之評論東西思潮の默移を紹介す○出版月評內外新著月旦○時事危言激論痛議氣虹の如し、等

發行所 東京市京橋區出雲町一番地 大日本社

◎第二版成る◎

故若松賤子女史譯述

小公子

全一冊洋裝美本
頁數三百五十頁
正價金三十五錢
郵税八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるゝと數十回、一代の流行を左右して一時少年の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本當代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化し、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、言行惣て甘露慈雨の如し、讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるゝを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや、少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史曩に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を乘る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるゝと切なり。即ち玆に其遺稿を收め、女史が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、鄉友松井昇氏は密畫を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元 東京日本橋區本町三丁目 **博文館**

大賣捌 東京麴町區下六番町六番地 **女學雜誌社**

◎次號預告◎

次號(五月十日發行 四百四十一號)口繪としては、昨年の末つかた我邦の諸新聞紙上に喧傳せられて天下の耳目を驚かしたる米國ハーバート大學々生たる古今未聞の盲唖の一秀才、ヘレン、ケレル孃の肖像を掲く。この肖像は瀧川學園長大須賀亮一氏が去歳渡來の砌、同孃に面接して、親しく請ひ得られたるものたり。

又ケレル孃の傳記幷に同孃を敎育するの方法等に關する詳細の記事は、青柳有美氏の筆に成りて次號に讀者に見えん。

明治廿七年二月十四日内務省許可
明治三十年四月廿四日印刷
明治三十年四月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場
(電話本局十九番)

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY